臣東人之所置也天平寶字六年歲次壬寅參議東海東山節度使從四位上兵部省卿兼按察使鎮守府將軍藤原惠美朝臣朝獦修造也

天平寶字六年十二月一日

此の碑荒草寒烟の中に埋沒すること一千年所、德川の世伊達綱村儒臣に命じて搜索せしめしも得ず、後これを市川橋の橋材中より物色し獲たりと、字體渾樸見雲眞人の書するところと稱す

千賀の浦

鹽竈○鹽竈神社○神竈○菖蒲田○松島○松島に遊ぶ記○富山の登臨○大仰寺○稚子が崎○渡月橋○雄島○落雁峯○五大堂○透し橋○瑞巖寺○觀瀾亭○經が島○九野島○王塚の濱○不老山○東灘○宮戸島○其他の島々○其他の浦々○金華山○五峯四十八谿○白石英塔○鮎川村○山雉の津○鹽竈神社の裏阪に叢勝樓あり○海老屋、太田屋、齋藤等旅館多し、此より舟を傭ふて松島村に至る○菖蒲田に大東館あり鹽竈より人力車あり○松島村に觀月樓、加賀三亭、鈴木屋あり皆旅亭を兼ぬ

『鹽かまの浦ふく風に霧晴れて八十島かけて澄める月影』と歌はれたる千賀の浦は、仙臺の次驛岩切の停車場より日本鐵道の幹線に分れて瀘車は走ること十哩、鹽竈の停車場の在るところ、魚鹽の富あり、陸には市廛を連ね海には船舶を簇らす、鹽竈の山、小松崎、藤陰が山、藤陰が灣、何ぞ其の名の愛するに堪へたるや、山上に曾て古藤あり、花開いて波瀾紫に、花落ちて波瀾又た紫、乃はちこの名ありと、碧玉盤上恍として玉樓の浮ぶが如きは天女島の天女廟と笹離島の笹離神社、而して其の鹽竈神社なるものは町の北の丘上に在り、左宮武甕槌命、右宮經津主命別宮岐神、併せて一宮正一位鹽竈大明神といふ、廟宇華麗、背に青嶂を負ひ前には危磴百餘級あり、樹にいまだ老ひざるのものなく、甚だ深幽なり、往古鹽土の翁の、初めて潮を煎て製鹽の法を民に敎へしと稱する土竈は、今や神として祀らる、四竈あり、徑皆約四尺餘、竈中に水を湛ふ

鹽竈神社境内

鹽竈町の南一里半にして七が濱に菖蒲田の海水浴場あり、瀾紫松碧、遙かに大洋の雲濤を望む、伊達政宗、曾て此に遊び呼で眺望が崎といふ、

松が浦島あり、政宗の游燕したるの館亭あり、浴場は則はち此の邊、潮徐やかに度りて汀邊の砂は珠璣を布けるが如し、黒崎の岩、萱島の花淵、十三塚あたり、斗出する巨岩の上に箕踞して以て東海の大波瀾を看る、亦た壯快、旅館三四あり

松島

松島の勝は天下に藉甚す、其の五山*を以てせんとす、唯だ悲しむ文字拙劣其の萬一を描くこと能はざりしを、

鹽竈神社

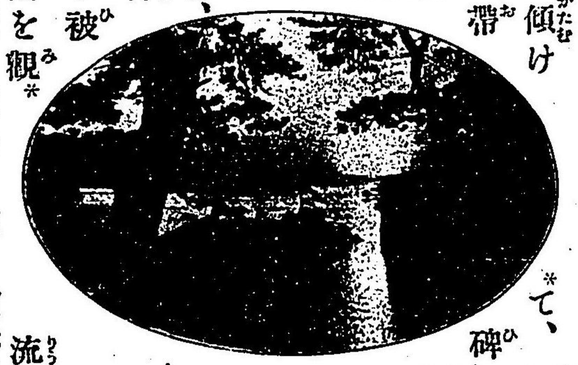
*七浦八百八島の晴好雨奇の勝概を寫さんとすれば、能く一斛の墨を揮灑するも亦た足ざるを憂ふ、余の曾て遊びし時正に中秋、記あり一片の風興を寫し、某雜誌に寄す、取つて松島の記に代へ、更にこれに繫するに諸名勝

曰く

箇々八百青螺の松、紫膏を湛えたるごとき晴灣の波に映じて一幅天然の畫圖を展べ、波に瀾あり松に韵あり、更に烟霞を布置せしめ、欹帆仄帆を點綴せしめ、蟹歌蜑謠を搖曳せしめ、日の大濤を排して出づる の曉、月の金華の陰より昇るの夕、雲物の妙を極めて詩の神歌の粹を看る人の懷中に推し、風興を天地と冥合せしめ、曾て幾個の詩人をして其の錦心繡腸を傾け盡すも又たこの大品題に向かつて一辭を贊する能はず、吟髭捻斷して兩鬢の一夜に絲々たるものを加へしめたるかを知らず

千年の古關門白河の關を月の中に度りて、鴻雁霜に苦へ征夫夜語るの昔を想ひ、扉を推して顧望すれば、兩三點の燈影、四五個の樓影は矢吹、須賀川、郡山、さて本宮、二本松、やがて福島の町に車は少時停りて、更に桑折を過ぐれば日は十七日時は午夜、是よりは古の陸奥縣は宮城、國は陸前に入りぬ、白石、大河原、岩沼の長短亭を度りて、車は終に仙臺に停る、車を出づれば鷄鳴あり、時辰を視れば正に二時を過ぐること央

車を僦ふて旅館を訪へば、主人眼を摺りつゝ出で迎ふ、言ふこと頗る含糊、蓋し半ば睡れるなり、飯を命す、飯至る、膾や炙や、皆な疇昔の夜新たに網に上りなるの魚と稱す、三十四長短亭一百里山河、一壺の酒を栗橋の月に傾け盡し東京の餘酲を滯び得て終に眠に就く、一睡陶然欠伸して起てば日既に三竿なり、朝餐の後ち芭蕉の辻を看、廣瀬川を度りて青葉の城を看、彼の被髪獨眼の人の遺圖を觀て、碑を讀み、歸途星貨舗に就きて名取川埋木の硯一枚及び宮城野萩の軸つけたる小筆五六枝を買ふ、青螺八百青澌に散布せる松島中秋の月は正に今月今宵なり、嗚呼一年十二回の圓而かも中秋の良夜は毎々流緣に富みたる、都を距ること遥々一百里、この日本三景中の第一絶勝なる松島に良夜に逢ふ、而かも故らに此地に此の月を看んとて來りしにあらず、行旅の途次この清宵を迎ふ、この日風和らぎて日は麗らかに、天は紺碧の色をなして今宵



松島雙子嶋

生憎の事多しとなす余輩何ぞ風

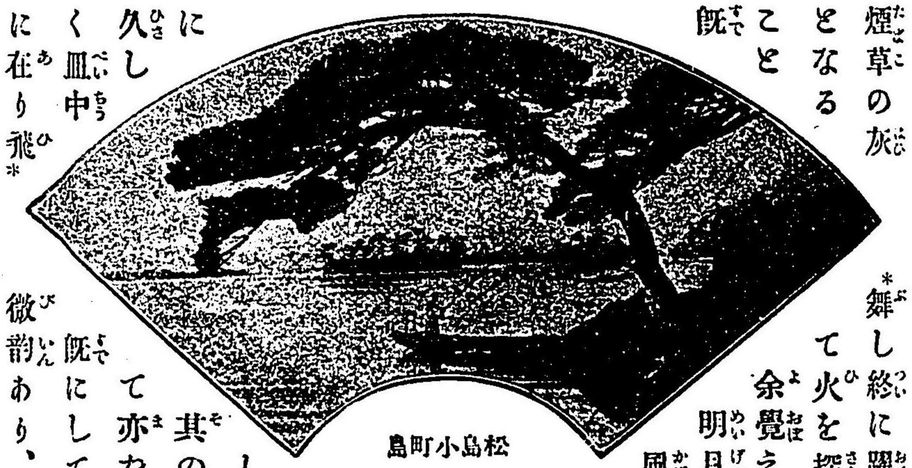
の月色千里白盡の景を想はしむ午下三點鐘、停車場に至りて鹽竈行の途中の景物平日に在りては指顧應接して奇と及び快と稱するに足るもの、而かも余が心は松島に往きて此にあらず、終に鹽竈に着し鹽竈神社に詣る、石磴面を壓して起ち、古樹▲堀川帝の御題に入りし名樹と稱す、余徘徊顧望して更に所謂神竈なるものを觀んと欲す、短簑を腰に結びし一人あり被髪徒跣にして余が前

松島辨天島

▲深然として老翁人の衣袂を染む、既に廟前に至つて仰ぎ觀れば老碧古丹壯麗を極む、廟前鐵燈籠多し、其尤も古りたるものは鎮守府將軍藤原秀衡の男忠衡が寄附するところの物となす、鏽華爛斑として古香懷中を吹く、廟傍一老櫻曾て

に磬折して曰ふ、小艇艤して彼に在り貴客を俟つと久しと、終に誘はれて汀に下り艇に乗る、舟子二人一人は舵を操り一人は櫓を行る、この時に當りて晩潮漸く多くして跳魚は雨の如し、舟は其間を行く、櫓の過ぐるところ、倒景皆動く、時に魚の舟に飛び入るものあり、海氣氤氳として松島何くの所ぞ、漣漪は舷に觸れさながら芭蕉に濺ぐ春雨を聽くの心地して、舟の行くこと遲々、之を久ふして此處彼處に浮びたる漁舟が魚釣り上げて彎れる竿と綸との間より、幾個の青螺は見えたり、やがて舟は帆をあげぬ、走ること極めて駛し、舟子櫓を操るの手を閑却し、乃ち腰間を探りて煙管を出し、煙を吹きつゝ余が爲めに指點す、曰く雛しを曰く屋形島曰く都しを曰く伊勢島曰く辨天島、毘沙門島曰く内裏島、烏帽子島、兜島曰く材木島、女夫島曰く何曰く何と、島として松あらざるなき島は次を逐ふて余が舟を迎ふ、日は晩に向ふて遙波漸く白く近水漸く紫に、島は次第に多くして前後左右應接に遑あらず、舟子指點して其の名を語る事尚ほ口を絶たず、連りに數十島を列擧し、終りて更に牡丹餅數個を啣みたるより脹やかに其頰を膨らせて、然る後ちに嘯ぶくの如く烟を吐き又語を續く、火皿の中、

煙草の灰となること既に久し皿中に在り飛び舞し終に躍りて舟子の懷中に落つ、舟子周章襟を披きて火を探ることと之を久しうして、僅かに心を安ず、



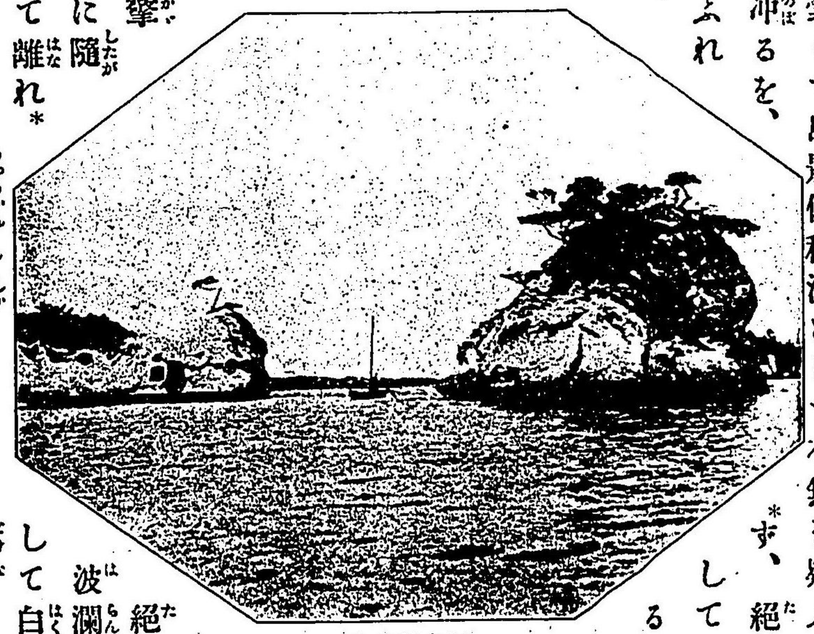
松島小島町

余覺えず失笑す

明月の夜は將に來らんとす、露は既に零ちたり、風あり此八百の青螺を度れば、松露千萬點吾が敷たる十府の蒲莚の上に吹きかゝらんとす、されども松の葉毎につらぬき留めたる白玉に宿りたる詩の神を飜さじと風はなきなり、波は起たず、舟子更にいふ、黄金しろかねの光りまばゆき政宗公の御廟も、風雨に朽ち界てゝ礎のみ後に殘れる時あるべし、唯だこの八百八島の松の翠は、千萬年も其の色を變へじと、沒風流漢も自然の美に感じて亦たこの語をなす

既にして舟正さに松島灣に入る、波に小瀾あり松に微韵あり、暮靄遠くより來りてさながら紗帳を張りた

るがごとく、波に布き島を縈りて島影依稀淡として有無を疑ふ、忽ち見る數道の白光高く東天に冲るを、長さ各々十數丈、これを喩ふれば猶ほ彗星の白氣のごとく、雨後の霓その色老ひて將さに斷えんとするがごとし、舟子曰く月將さに昇らんとすと、余眸を凝らす、既にして遙波縹緲の中物あり、微に露はる、其色純黄、看す〳〵月出づること正さに半規なるに及べば、その邊の波瀾逆しまに昇り、首を擎ぐるもの〻如く、月の昇るに隨ふて漸く高く、離れんとして離れに飛び、月は躍然として昇ること一兩竿、然れどもこの時尚ほ未だ清


松島蓬莱島

*す、絶えんとして絶へざること宛から藕の絲のごとく、絶ゆれば、波瀾は崩潰して白華四もとして俄然として漸く伸て

輝を發せず、黄心にして金環、滾々として轉ずる一瞬にして千百回、黄心漸く消えて終に團々たる明月となり、銀箭八表を射り、海波明淨透徹し、箇々の青螺は實に銀沙盤上に在るがごとし、見渡せば島々は其月に背ける半面は昏く、月を浴びたる半面は白し、瀲灩たる金波を通じて彼方此方に漕ぎ行く漁舟の人のうたふ歌の聲、島隱れに聞えたり、小町島は眞白に化粧して、風吹き渡る辨天島の松が枝は微妙き琵琶の音あらん、毘沙門島のかなた兜島の島蔭に、低くかゝりたる星二つ三つ醒むるが如く青くして、寢床の島は夢のごとく烟のうちに淡く見え、籬が島に時ならぬ卯の花の見ゆるは何物ぞ、松の露を吹きて浮べる小魚喙まんとて翼を休むる千鳥にやあらん、屏風が島に舟を寄すれば、四邊の峭壁は削るが如く、老松盤桓して龍の下りて波に飲むのさま、天然の畫屏に對するかを疑ひ、仙冠島の奇なる、繪の島の繪のごとき、翁島、姥島さては笙が島、笙が島の松風は如何なる調べを波に合すや、鄙島、都島さては賤が島、内裏島も亦一樣の月色

余は舷に靠りてこの大風景に對し、骨を琅玕となし肉を珊瑚となして即身直ちに仙化せしかを疑ひ心下に一塵事なし、舟の島を掠めて松下

を過ぎさるの時、海風松を度りて露隕つること多く、月華之を射りて粉として珠璣を下すがごとし、一島送り去れば一島迎へ來り、飽くまでこの好風光を占領して興正さに央ばなる頃、舟は早く松島村の五大堂島の畔の沙上に横たはりぬ

余は舟を捨てゝ汀に登る、群童あり手を聯ねて環を作し且つ舞ひ且つ歌ふ、旗亭毎家綵花燈を簷に懸げて薄花糕子を置く、これ村人がこの三五の月を歡び迎ふるところのものなり、旗亭に入りて樓の最高處に登り、酒を把りて月に對す、松上波あり、瀾影松影逐次累層して終に遙波の中に入り、渾沌として一色となり、潮來りて月光天地に滿つ、壯快いふべからず、余は既に微醺を買ふて樓を下り、更に五大堂島に行く、島は汀に尤も近きほとりに在りて、一橋ありて通ず、所謂洗橋なるもの、老松偃蹇古蘚鱗のごとし、月を踏みて第一橋を度る、橋は尋常一樣のものと其の結構を異にし疎らに橋板を幷べて其間數寸、急潮月華を浮べて橋下に盤渦を成し、橋板の間を透して奇文欄干に映ず、第二の板橋を度る、橋の製は前のごとし、幾年の雨鏤雪刻、橋は骨立して木理頗る分明なり、所謂五大堂は結構素樸、金剛格子、柱楹欄楣

丹碧皆な剝落し、一味の古色を帶ふ、月光を借り來りて堂の中を窺へば、帳幔深く鎖して昏黑龕を見ず、堂邊を逍遙し吟賞之れを久ふす、既にして西天に雲あり起る、その形蓋のごとし、見ること少時にして風俄かに起り、雲は更に雲を吐きて漸く半空を掩ひ、逐次に島影を奪ひて更に月を呑まんとす、月色是に於て暗澹美哉の風色看れども見えず、昏潮の岸を打ちて回るの聲やうやく高し、余やこの良夜の大看を盡さゞりしを悵惘し、徘徊顧望して去るに忍びず、雨乃ち到る、會ま島蔭夜泊の漁舟あり舟子蓬窓を推して歌ふて曰く『さんさ時雨か茅野の雨か音もせで來て濡れかゝる』と、是れ曾て彼の獨眼龍が作るところの軍歌、風韻清迥無心の漁夫眼前の景物に看端りなく發してこの歌となる、實に其の歌ふが如く、雨は潮聲に亂れて啣枚して下る、八百八島の松も亦たこれに和して蕭々として昏灣に寂寞を語る、仰ぎ見れば月は彷彿として微雲の中を行き、鮫綃張中の美人眉彎瞼暈澹として無からんとするを望むが如し、是に於て觀瀾亭を訪ふて危欄に凭りて沓潮の奇を看ること能はず、更に瑞巖寺の門を敲きこゝの雪月の妙を賞せんとし磴を攀ぢて門に入る、寺中盡く松籟皆な梵唄の聲をなす、

伽藍頗る高崇、佛燈青燐のごとく滅せんとし、復た明、隱々として古龕の中に佛像を見る、龕邊一僧の守るものなく香爐の烟を吐くこと縷のごときあり、洩々龕を繞りて濕うて飛ばず、風來る毎に香烟頽れ散りて春くがごとく、細々として來り人の袂を吹く、凄陰幽寂久しく注まるべからず、法身窟伊達氏の廟宇皆な看るに及ばず、更らに富山に登りて雲物の變を看んとせしが、夜は漸く闌けて路遠く雨も亦た大に至らんとするを以て、終に割愛して松島停車場に赴かんとし、昏中を走ること一里野橋を渡れば、月亦た雲を出でゝ一路はなはだ微白、蕎麥の花一面なるあり、踏み來りて是れ霜かと疑はる

凡そ松島の大景を看るに尤も善きは、松島村の東北二里富山に登臨するに在り、危磴數百級をのぼり杉檜の深處に向て行く、林朗然として豁けて伽藍あり、大仰寺といふ、大仰寺より松島灣を下瞰すれば八百八島の風光歷々として雙眸の中に入る、山巔に更に大悲閣あり、坂上田村麿の建つる所、將軍騎馬の像あり、寺僧を請ふて指點して、某の島、某の山、某の磯、某の澳の、詩あり名あり題あり逸史あるものを說かしめて之を聽く

一灣、更に一灣、水の碧靑を堪へたるが如きのところは是れ稚子が崎、昔し宮千代なる寺僮あり容姿端麗綽約として處子の如し、日夕徂徠の途この磯邊に佇立して吾が影を水に照し看る、故に名あり、また一篇の詩にあらずや、瑞巖寺の東に天童庵あり、宮千代の墳あり、峭壁廻潮を通じ一橋飛んで島に架す、磯は小松が崎、橋は渡月橋、島は雄島、雄島に隣りて畫屏を立つるが如きものは是れ屏風が島か、秀然として高きは朱鳥山、山の最高處は鷲が峯、山舒びて海に入るところ落雁の如し落雁峯とは是れ、落雁峰の西に櫻が岡、春闌はなるの時櫻花不斷の雲を作す、峯につゞいて更に挺然として一峯立つ、大澤といふ、石磴隱々として松間に懸るを見る、鈴浦や峨嶢崎や、翠松舒びて水に入る、其の地、懸巖の下に洞あり、木葉石を生ず、筆架浦につゞく

僧は更に松島村に近く二嶼を指さして曰ふ、これ五太堂なり、島中の堂宇は坂上田村麿が建るところ、毘沙門天を置き、後ち慈覺大師五大尊を置く、二橋あり島と島とを通ず、透し橋若くは渡江橋なるもの是れ、橋板を置くに間處あり、廻潮を透し見るべし、古歌の所謂藤さきかゝる松島の橋なり、隣るものは天童庵、宮千代の芳骨を瘞むるところ、蔚然と

して千松の中に大伽藍を見るものの是れ松島村の瑞巌寺、淳和帝の天長五年慈覺大師の創建するところ、中興の祖を法身上人といふ、名は眞壁平四郎、浮屠となつて入宋し、衣鉢を經山の無準より傳ふ、唐土の僧來り住するもの多し、政宗の時に及びて大いに土木を起し、輪奐の美を極む、佛殿廣さ二十間、横十二間、胡銅の觀世音を安置す、堂内の彫刻繪畫皆な當時の巨匠大家の作、明治九年　今上巡幸の時の*

亭畫くがごときものは觀瀾亭、政宗太閤より賜ふところ伏見の桃山殿の一部を移して、これを建て、燕游のところとなすと、匝らすに貝玉垣を

*行在所たり、寺什に火鈴及び翁の面、佛舍利等あり、法身窟あり、陽明院、天麟院、圓通院

松島不老嶋

あり、皆な伊達家の靈廟、故華麗たりしも今は荒廢す、山門の左右に旅舘多し

瑞巌寺の南の平磯は是れ觀月崎、水

以てす、亦た伏見より移せしものと觀瀾亭の東數嶼相倚る、五重塔あるの島は經が島、修竹萬竿翠り雨降らんとするものは福浦が島、毒龍庵あり

徳浦の島、九野島、相倚り相離れて仙冠島、千部島、旭日島、青柳島、雀島、繪島あり、九野島尤も大、白練洲を前にし金華山を望み、別に雪島、藤島、天屁島、白洲、月島、月島は形ち新月の如く白洲には青松に交ゆるに緋桃あり、花時斷霞一片を深翠の中に見る

脚下に漁農の家簇々數十家なるもの是れ王塚の濱、古墳あり二十餘基、皇子の墓、妃嬪の墓、大臣の墓あり、別に鏡の神社あり、古鏡を祀ると、何の代か高貴の人難を此の千賀の浦に避けたるもの丶趾か、汗青この事を逸して、王孫墓畔空しく行客の涙を濺がしむ

遙松一路王濱より起りて截ちに海に入るもの一里、これ白練洲なり、餘景が濱の不老山、巌下に洞窟多し、急潮を吐呑す、潮力の鏤摩するところ、巌に隱々として佛像を現す、尤も奇古

蟹舍蜑莊參差として連なるもの丶東灘の濱、其の前に横たはるものは宮戸の大島、島の中に奇勝多し、都島、屏風島、高島、海蝦洲、鷹島、曲玉

島、松の島等星布して海を掩ふ、其の島の小なるもの擧て數ふべからず、凡そ島あり、乃はち松あり、瀾光と映帶し、畫か畫も及ばず、詩か詩も歌ひ易からず

竹の浦の東南に雄島あり、長橋相通じて松逕幽邃、吟松庵あり、見佛堂あり、把不信軒あり、賴賢碑あり、五輪塔あり、磯に多く卒塔婆を立つ」是に於て松島の勝は指說し終る、聽くもの獨り娛しんで僧は既に倦む、堂に延て芳茗を淪し茶に媒するに梅餅を以てし、身は既に畫中に在り、意は終に詩境に入る、

今茲(三十二年)三月下澣、著者、既に青森の碇關の雪を觀て、歸途陸中の平泉驛に下り、中尊寺を看、毛越寺の古跡を過り、達谷の洞窟を歷て五串の瀧に至り、更に一の關驛に入り、瀝車に乘じて松島驛を度り、曾遊の興を憶ふて再び松島を訪ひ、五大堂畔の旗亭に宿す

此夜月陰りて海色蒼茫たり、八百の青螺依稀として淡靄の中に在り、中宵にして夢覺れば鴉の亂啼を聞く、起きて牖戸を推せば月色清明、歇島仄嶢恍然として碧瀾の上に浮ぶ、風靜かにして萬松に微韵あり、醒後の情殊に佳なるを覺ゆ、翌早起、日未だ出でず、先づ海岸を散步し瑞巖寺に詣る、法身窟、左に唐吳道子作支那南海普陀山立るところの白衣大士像の碑あり、寛政庚申夏五月、曲江池維明の摹刻なり、右にも亦た觀音像の碑あり、高さ一丈ばかり、上に慈眼視衆生福壽海無量の十字を題す、文政六年瑞巖寺百十五世東鼎の立つるところ、亦た曲江の刻なり、法身窟内に碑あり、法身の石像あり、像を匝りて石佛多し、更に中門に至る、寺僧未だ起きず門は尙ほ關せり、門は慶長十四年政宗の建つるところにして今を距ること實に二百九十一年を歷たり、瑞巖圓福禪寺の大額を揭ぐ、徘徊すること少時、出でゝ海に沿ふて長橋を度り、雄島に入り、竹樹幽邃の古逕を過ぎりて松吟庵に少憩し乃ち歸る、近ごろ新富山といふものあり、松島村の中に在り、一石丘のみ、上に松樹あり、松根に踞して騁望すれば、松島八百の青螺其の十の一を看る、

金華山

陸奥山に黃金咲くと歌はれたる金華の山は我が國の極東、宮城縣、牡鹿の郡の端、蒼海中に屹立し、高きこと八百尺、五峰並び分れて四十八溪谷あり、金沙を流す、山に金華山大金寺あり、更に黃金神社あり、聖武

帝の天平勝寶元年、始めて黄金を出したるところは此、山の東南の山腹に白石英の輪塔あり周圍四丈六尺、古、雷あり震ひて中斷して溪谷の下に墮す、其の跡に二巨樹を生ず、萩の濱の南を極めて鮎川の村に至れば、急潮奔駛して遙かに金華山の山雉の渡と相對す、其間二十四町、賽者鐘を鳴せば山雉の津頭より舟して來り迎ふ

山皆な花崗質、他石を交えず、麋鹿數十あり、宰殺するを禁ず、來往して甚だ人に親しむ、磴壇を盤廻して祠に詣る、雲冷やかに日寒く、天風髮を吹ひて魑魅肅として驕らず、尤も靈境となす、祠官の家人善く琴瑟を彈ずるものあり、山中巨石の天に倚て立あり、天柱といふ、黑崎の巖、大濤を看るに好し

惜むらくは去歳火あり祠廟を烏有となす、唯今只、月明かにして神鹿大乙の壇邊に游び、潮紫にして仙猿の少眞窺畔に啼くあるのみ、

凡そ此山に詣るの人は、踏遍したる草鞋を脱却して歸舟に上らざるべからざるを例とすといふ、蓋し曾て沙金の富饒なりしの時、地を踏みて鞋間多く金沙を含み去るを以てなり、山の下に海鼠を產す、金沙を含むを以て金海鼠といひ、乾して四方に輸出す、人珍重す

平泉の中尊寺

平泉○中尊寺○經藏○金色堂○中尊寺の記○高舘○九郎木像○衣川○夏草や武士どもの夢の跡○毛越寺○達谷の窟○五串瀧の記○沓が鼻○天工橋○五串と寢覺○溫泉○平泉は一の關驛の次の停車場あるところ、一の關よりの北二里餘道路平坦なり、一の關は奥州の一名邑、五串瀧は一の關町の西二里、亦た車を通ずべし、瀧は四流となり京田、下多羅、小松、大瀧といふ、一の關には旅舘多し

上國の戰塵飛んで到らず、東風占斷す六十春と歌はれたる古奥州の羈者藤原の秀衡父祖三代の治府なりし平泉は、一の關停車場の北の方二里餘のところに在りて、今も尙ほ村に平泉の名を存す、平泉の停車場あり、秋風の吹く白河關北、玫瑰匂ふ卒土の濱かけて縱横一百餘里、西は日本海より南は太平洋に至るの地を掩有し、海を煑山を鑄り、黄金の華さく陸奥の大野に盤踞して曠世の豪奢を極めたりし奥傑は、今中尊寺の金色堂内螺鈿の須彌壇下に靜かに眠れり、

中尊寺は昔し慈覺大師の創立たりしを、後藤原の秀衡清衡等大いに淨財を喜捨して堂塔四十餘宇僧房三百餘宇を造くり、莊麗華美實に東奥第一

の大伽藍となりぬ、建武年間火あり、堂塔烏有に歸し、今は唯だ金色堂及び經藏の二個を存するのみ、經藏は清衡の作りしところ、元は二層樓なりしが火其の上層を焚きしが爲めに、補修して今の堂宇となす、内に清衡基衡の納むるところの紺紙金銀泥の一切經を藏し、文殊佛等を置く、謂ふ毘首羯摩の作るところと、頗る精妙と稱す、金色堂は經藏の南東數十歩のところに在り、天仁二年清衡の作るところ、堂は三間四面、柱は一丈九寸、内外四壁龜布を卷き、黑漆を塗り、上に金箔を密貼す、堂内の柱には胎藏界大日十二體を圖し、又螺鈿にて細文を描彫す、須彌壇三座あり、皆な螺鈿を施こし、皎然として光輝を發す、内に清衡基衡秀衡の三代の屍を納む、明治三十一年の夏此の堂を補修し壇を開き棺を發して其の屍を見る、屍は既に枯槁して木伊乃となり、豪傑の面目活けるが如かりしといふ、初め此の堂を作りし時金光陸離として北上川の水に映じ、魚怖れて遠く遁逃し、終に一鱗の釣罟に上るものなしと、因て光り堂といふ、風打雨淋六百歳、金光多く剝落すといへども尙ほ舊觀を想ふべし、此の地前に北上川を帶び、衣川に接し、寺域東西十七町、南北十三町、老樹多く、阪口より山上の光堂に至る六町二十間、多賀寺、釋迦

堂、兩界堂、二階大堂は、皆な金銅佛を置き頗る莊麗なりしも、今は存せず、金堂、文殊樓三重寶塔、斷礎を覓むるも終に得べからず、南谿の曾て中尊寺に遊びしを記するに曰はく

奥州平泉は、むかし奥羽の大守鎭守府將軍秀衡父祖三代居住の古城跡なり、前に北上川衣川を受け後は高山幾重となく重なり、實に要害の地なり、秀衡、清衡など建立せる中尊寺、今に存在して昔の俤まのあたり見ゆてあはれなり、此の山を關山といふ、麓の街道に昔關所ありて衣が關と名づく、此の坂にこの山を關山といひて中尊寺の山號となり、衣といふ里に流るゝ川ゆゑ衣川とも名づけ、衣の里の關所ゆゑに衣の關ともいふなるべし、安倍貞任が籠りし衣川の城は、此中尊寺よりは一二里ばかりも山に入りてあり、又義經の住ひたまひし高館は、直に此の關山の下にて繞かに街道一筋をへだてゝ中尊寺より五町に近し、高館の跡は甚だ狹く、繞かのところにて中々當今の城廓などのごとき跡とは見ゆず、唯だ暫時義經の住みし屋舗の跡といふべし、今は草木生茂りて芭蕉の發句の如し、此あたりに龜井六郎が塚、鈴木三郎が塚等あり、皆な古松一本づゝありて、明白なり、辨慶が古跡もあり、

又中尊寺の鎮守白山宮のうしろより少し西へ行けば、物見の亭の古跡あり、此所より見はらしよろし、向ふに見ゆる山を陣張山といふ二つの地名となれり、是は頼義、義家、貞任、宗任追伐の時陣を張れる所といふ、又これより手前に見ゆる野を長者と原といふ、金賣吉次信高が屋しきの跡とて今に廓石少し殘れり、又東北の方に高く見ゆるはたはしね山也、西行の『聞もせずたはしね山の櫻花吉野の外にかゝるべしとは』と詠める山なり、昔は櫻多かりしが今にては歌のごとくはあらず、余が京を出づる時佐々木長春陸奥にはたはしね山とて櫻多き山ありといへり、花の頃ならば必ず尋ねて見るべしとて和歌なぞおくられぬれば、奥州地に入りてより日々尋ね求めてやう〳〵此處にて尋ね得ぬれど、花なくして本意なし、されど一しほ昔思はれて例の腰折なぞつゞる、それより中尊寺に詣でゝ諸堂順拜す、此の中尊寺は弘臺壽院ともいひて東叡山の末寺、開基は慈覺大師にして其後年經て鎮守府將軍藤原清衡中興なり、清衡は秀衡の祖父にして此時既に奥羽二州の大守、勢ひ殊に盛なりしかば此の中尊寺を中興して堂塔四十餘宇禪房三百餘宇を建立すと也、其の結構金銀珠玉をちりばめて全盛を盡せり、

此の事堀川院鳥羽院等の叡聽に達し、遂に大治三年丙午按察使中納言顯隆卿を勅使として此の國に下したまひ、御願文の草稿は右京太夫敦光朝臣清書は冷泉中納言朝隆卿にて今に此の寺の什物とす、猶ほ此の外に右大將頼朝の御敎書、又北條相摸守貞時、北畠中納言顯家、淺野彈正少弼長政、豐臣關白秀次等の文書數ありと也、みだりに見ることを許さず、さて右の堂塔伽藍建武四年回錄し、總かに經藏一ヶ所金光堂一宇を殘せり、是れも星霜久しく移り段々破壞に及びしを、百八十餘年の後に至り、正應元年鎌倉將軍惟康親王歎き思召し、北條貞時に命じ此の二つの堂に又別に新たに覆ひ堂を造り、風雨を避け修繕を加へしめたまふ、其後今日に至り時の國守より代々覆ひ堂を修覆して風雨を防ぐ、此ゆえに今日に至り清衡建立の金色堂幷びに經藏嚴然と殘りて、むかしの俤あり、就中金色堂は殊の外美麗にして、日光山の外世間に比すべきもの稀なり、こと〳〵く布ぎせにして厚く漆を塗り、其の上に金箔を押して堂中一樣金色なり、長押の地紋には螺鈿珠玉をちりばめ、中壇四隅の柱は七寶を以て壯嚴なり、既に五六百年を經てあれば、螺鈿も貝落ち珠玉も缺損し、金箔も斑なれど、元來結構丁寧

なれば今に猶あたりをかゞやかすばかりなり、此の中壇の上には阿彌陀、觀音、勢至等の佛像を安置し、壇中には三人の棺を納む、中は清衡、右は基衡、左は秀衡なり、秀衡の棺の側に和泉三郎忠衡の首桶を納めて今に祭に配す、清衡は大治三年丙午七月十七日逝去、其の子基衡保元二年丁酉三月十九日逝去、其子秀衡元治三年丁未十二月二十八日逝去すといふ、此の堂に納むる所の什寶數多き中に、清衡の納めしとて、紺紙に金泥銀泥にて楷書行書まぜ書きの一切經あり、是は清衡存生の時自在坊蓮光といへる僧に命じ、一切經書寫の事を司どらしむ、三千日の間能書の僧數百人を招請して供養し、これを書寫せしめたりと也、余も此經を拜見せしに、其書體楷法正しく、行法亦た精妙にして、漢土の諸名家を集めて書せしむるとも中々之に優るべからずと思ひ、彼の時分日本にもかばかりの能書多きに、今の世に誰れ一人聞ゆるなきは誠に歎息するにも餘あり、其後四海戰爭の事に穏かなるいとまなく、文華地に墜ちたるが故なるべし、其の人の不幸ともいふべし、數多き一切經の事なればなるべき事ならば、一二卷づゝも世間に出したき事にこそ、經の箱は黑漆に螺鈿の題號を去るしたり、其の箱も亦

た古雅甚だし、此外には基衡納めしは宋版の折本の一切經なり、此外に玉軸の法華經一部、小野道風の筆蹟なり、是は余見ることを得ず、誠に殘念なりき、又天台大師の影像一幅、地は竹布といふものにて畫は唐人にて其名知れず、賛は顏魯公の筆といふ、是も當寺第一の寶物として見ることを許さず、慈覺大師唐土より將て來るものなりといふ、其の外金岡の畫の十三佛、牧溪の觀音等種々寶物多し、基衡も亦た尤も佛法に歸依し、毛越寺圓隆寺、喜祥寺等を造立す、佛工運慶をして丈六の藥師如來十二神將其の他佛像若干を造らしめんとして、まづ運慶方へ使者を遣し賜り物す、其の品

一　金百兩
一　七間間中徑の水豹皮六十枚
一　希婦細絹　二千端
一　白布　三千端
一　鷲羽百尾
一　安達絹　千疋
一　糠部駿馬　五十疋
一　信夫文字摺　千端

猶その外に奥羽の產物珍奇を盡して取揃へ運慶に送る、運慶之を得て大いに悅び、又奥州の練絹を稱美す、使者歸りてこの由をいひしかば、基衡又練絹を三艘の船に積みて別に運慶に贈る、運慶悅び自ら件の佛

像をつくり、玉眼を入れて三年の間に功を終り、奥州に送るといふ、佛像に玉眼を入るゝこと此時より始まれりと也、是等の事にても當時平泉の盛なりし事思ひやらるべし、秀衡抔の頼朝をだにあなどり居たりしもむべなり、

是につけても思ふに、今の世程太平の久しき事もあらず、それに依つては金銀も世の中にたくさんに成りぬと見ゆ、平泉の盛なるにてもさへ、右の賜物に金は纔か百兩と見えたり、外の物の多きにぱつりあはず、又俊乘坊南部大佛殿建立の時も、鎌倉の寄附纔かに金五十兩と聞及べり、今にては帶の町人の分限にても、千金萬金の寄附するもの少なからず、されば今の世程金銀も澤山にて、よろづゆたかにおごれる時は昔より無きことゝいふべし

源九郎義經が舘したる高舘は中尊寺の傍に在り、一堂あり九郎の木像を置く、白皙短身して齒を出すと史に稱することの數奇男兒桓々の氣眉宇の間に現はる、豆箕千古の恨事、泣いて北海を踏んで靺鞨に入る、吊客をして悵惆して徒徊去るに忍びざらしむ、地は北上川に臨み束稻山に對ひ、山長く水流る、風景佳絶、此の邊皆な『夏草や武士どもの夢の跡』

衣の柵の趾なるもの衣川の畔に在り、八幡公の馬を馳せ弓を彎して『衣の柵は綻びにけり』と高唱するのところ、黄馬黑甲の將鎧袖を蹈して顧眄しつゝ『年を經し絲のみだれのくるしさに』と打吟し、雅懐春風の如き八幡公の弦自から空鳴、安倍貞任其の飛鏑を免かれたるは此處か、亦た是れ千古の風流

想ふに藤原氏、鎮守府將軍陸奥出羽の押領使を以て四方百里の地に盤踞し、虎視耽々として常に上國に對す、其富は王室に超え、平仆源興を視ること、猶ほ盆上の傀儡或は倒れ或は起つを看るが如し、商估を縱つて上國に貨貿し兼て其の形勢を視せしめ、義經の來投を拒まず、新に天下の總追捕使たる頼朝の赫々たる威令の前に對抗して下らず、白河關北、平泉に至るの間、數丁ごとに石卒塔婆を置きて里程を標し、且つ里にして一鐘を懸け以て來り犯すものあるの時の警をなす、其の志ざし少小にあらず、而も座して動かず、終に頼朝の亡ぼすところとなる、亦た哀しむべし、藤原氏亡びしより後三百年にして梟雄伊達政宗起る、軍政の事多く藤原氏に則りしといふ

五串瀧（自中尊寺至五串記）

今茲(三十二年)三月の二十八日、夜闌けて汽車は平泉の停車場を過る、車を捨てゝ驛に入れば、荒涼にして行人なし、遍ねく客舍を物色すれども覓め得ず、月黑く松昏きあたりを彷徨すること良や久しかりしが、一燈の松を穿つて來るに逢ひ、僅かに其の人に問ふて旅館に就きたり

故より寂寞たる寒驛なれば、旅館は唯だ此の家一軒のみなり、旅館とは名のみにて實は尋常一樣の田舍酒屋に過ぎず、主人余を誘ふて其の居間に導き火桶の傍に坐せしむ、坐を照すものは二分心の洋燈にて、漫遊書家が殘したる筆の跡の、春蚓秋蛇怪しげなる襖子に圍まれ、俳優の似顔畫を貼交せし二枚折屏風を厨の方に隔て立てたる、色の褪せたる毛氈布きたる、室の中薄暗きが中に、主人の髮を被むりて、眼大きく、獰惡の面相したるが、新來の客と見て頻りに古藤原氏の盛時を說き絮々として口を絕だず、余は既に聽に倦めり、去つて屋後の浴室に行き、衣を脫して浴槽に臨めば、膏垢槽中に浮動し穢臭鼻を衝き、浴するに難し、乃ち水を汲んで沐浴し、同つて室に入れば食膳前に在り、主人と相對し

て飯す、其の妻、一目を眇し、面貌殊に怪醜、余の爲めに飯を盛る、余僅かに一碗半を盡して乃ち箸を擱く

翌早起、飯前、旅館の少婦に導かれて中尊寺に詣る、長松路を挾さむ、行くこと八九町、乃ち關山、中尊寺の在るところ、路傍に辨慶松あり、火けて唯だ焦黑せる幹を殘すのみ、既に山に入れば石佛あり、老松大檜蟲々として天に參し、古碧人を照す、行くこと三四町、林し缺け山開いて豁然として北上川の大野の中に流るゝを見る、眺望甚だ佳なり、更に行くこと一二町、路左に下乘の古碣あり、廢門の中に入れば則ち辨慶堂、石華表、砌道、松叙滿地、小磴を登りて堂に賽す、僧人あり、扉を開いて什寶を見せしむ、左に辨慶自作の木像あり、高さ七八尺、眉尖刀を擁して立つ、右に義經の像あり、龍頭の兜を戴き、金甲を擐ち、金麾を執る、別に運慶作るところの鬼子母神の像あり

行くこと更に二三町、古林の中に三個の堂宇、數十步を隔てゝ相對す、尤も奥なるは金色堂、次なるは經堂、次なるは辨天堂なり、先づ金色堂に詣る、覆堂の中、金色堂立つ、金碧螺鈿、皆な多く剝落すといへども、古光猶は全く銷磨し去らず、三衡の遺骸は今も尙は螺鈿の須彌壇中の金

棺に横はるとぞ、壇の上には阿彌陀佛、觀音、勢至、六地藏、增長、廣目の二天都て十一體を安置したり、別けて中壇四隅には七寶莊嚴の捲柱を立て、柱毎に十二光佛を繪現したるが、尙彷彿として光を放つ、人として悵然として古を憶はしむ

去つて經堂に詣り、清衡納むるところの紺紙金銀泥隔行の一切經、基衡納むるところ紺紙金泥の一切經を看る、楷法端麗、看て心醉す、本尊は金容の文珠獅子座、鳥羽帝の賜ふところといふ、更に辨天堂に詣る、堂中紺紙に金泥にて大全光明最勝王經の文字をもて十界寶塔を繪がきたる曼陀羅あり、周圍には經文の大意を彩繪す、都て十幅、厨子の中に在り、綺麗驚くべし、今、國寶となる、

古道をたどりて某堂、某丘、某墟のところを過りて更に山を下り、旅館に歸り朝餐す、例の一目を眇せるの主婦、飯櫃を擁して侍坐す、蓬髮藍面、怪醜は昨夜見たりしところに勝る、勉强して二椀を盡し箸を投じて起つ、

平泉驛より五串に至る正に二里、五串より一の關に至る又た二里、實に鼎足の勢ひをなせり、行こと十餘町、路は長松林の中に入る、林中に一

佛堂あり、常行堂といふ、これ實に中尊寺と共に奥州の二大伽藍と稱されし毛越寺の古蹟なり、慈覺大師、此の地の王城の鬼門に當れるが爲めに堂塔伽藍を建立し、台家無上の法を二七の僧衆に授けて鎭護國家のところとなす、鳥羽帝の時勅願寺となり、清衡、家衡、堂塔四十餘宇、禪房五百餘宇を作る、泰衡亡ぶるの後、賴朝更に武門の祈禱の處となす、後、兵燹に罹り、常行、法華二堂の外、皆な烏有となる、毛越寺中の大金堂圓隆寺の趾は常行堂の右に在り、紫檀赤木を接ぎ金銀珠玉を鏤め、結構莊麗なりしといふ、堂趾に今尙は經五尺餘の巨礎四十有九、及び周圍の渠石を存す、常行堂の前は則ち大泉池、其の形ち一心の二字を成す、昔は池中に一島あり、珍石奇木を集め、池畔の文珠樓前より朱欄橋を架すること長さ十丈、島より南大門に至るの間更に十餘丈の鼓橋を架せりと、今は全く亡し、唯だ黃蘆の中に殘石の參差たるのみ、長松の下、荒草の中に一片碣あり、芭蕉翁の『夏草やつはものどもが夢の跡』の句を刻す、常行堂の北、大阿彌陀堂、今、假堂あり、舞鶴池看れども見えず、小阿彌陀堂趾に基衡の室安倍氏の墳あり、碑の高さ五尺許、前鎭守府將軍基衡室安倍宗任女仁平二壬申年四月二十日の二十五字を勒す、翠帳の

中に坐して綾衣玉食、左右を顧みて一呼すれば香閨の外に應諾するもの數十人、一世の豪奢を盡せしもの亦た黄土、落木隕露、一鳥啼て林を穿つて出で、飛んで池中の天を行く、人をして覺えず涙を墮さしむ、趣態ある松林に傍ふて行くこと數町にして林盡けて田圃、一水亂流す、流に傍ふて行けば川極まつて一瀑懸る、圮橋あり、一石華表を過ぎれば古林落寞、巨岩高きこと數十丈、呀然として洞窟となし、中に一堂宇を含む、宛かも樓門の形をなす、屋は窟の頂を摩し高きこと三丈ばかり、木欄を匝らし長梯斜めに通ず、是れ達谷村の窟の毘沙門天堂なり、梯を攀ぢて堂に登る、堂中毘沙門天の像あり、堂前に小池あり、石獅、石燈籠、墮葉の中、時に獸趾を見る、傳曰ふ延曆二十年、蝦夷の酋、高丸惡路王等、塞を此窟に構へ三十餘人の夷賊を率ひ、抄掠して駿河國清見が濱に至る、坂上田村麻、詔を奉じて之を討ち、高丸を射殺し、惡路王を擒にして、其首を斬り、京師に獻ず、東陲全く平らぎしかば、田村麻乃ち京都の鞍馬寺を摸して窟前に九間四面の精舍を建て、百八軀の多聞天を安置し、國家鎮護の寺社となせりと、乃ち是れなり精舍の右側、巉岩十丈、宛も大斧を揮つて故さらに劈開したるものゝ如し、嶄然として自然の屏壁を爲す、其の中央に端嚴崇偉なる一大佛の鏬刻せらるゝを見る、高さ三丈餘、星霜の久しき、剝落磨滅せるところなきに非ずといへども、猶は大日の像たるを認むべく、古色蒼然、優に一千年以上の物なり、蓋し精舍建立の當時に刻せるものならん、惜いかな、余知らざりしが爲めにこれを看ずして去りし終に山に入る、到るところ長松多し、風景繪くが如し、行くこと半里ばかり、山を下りて遙かに里落を見、漸く近づけば水聲の淙々たるを聞く、路は既に嚴美の村に入り、終に五串の瀧に至る、山峽迫り來りて岩井川の奔流を扼するところ、岩態水樣尋常のものに非ず徐ろに鉦を溪上に曳いて、水の激し岩の號ぶところを下瞰すれば、溪を成す皆な巖なり、上に赤松の異態あるを布置安排し碧水其の間を行き、上に天工橋あり、猶は畫中の物の如し、橋を渡りて數十歩すれば、岩に倚りて小亭あり、勾欄に靠つて眺望すれば、潭の碧き岩の奇なる、人をして塵外の想ひを發せしむ、友人幸田露伴の此の景を記するに曰ふ少しく木曾の寢覺に似て趣きは大きに異なれり、彼は溪邃くして水に遠く、臨川寺よりは、たゞ對ひの岸の岩の立てる河中の石の狀の奇なる、淵の

蒼々たる、水の尾の瀬をなして奔るを見るに過ぎねど、此は溪邃からで水に近く、橋よりは瀧を見るべく堂よりは瀨を見るべく、淵の蒼き岩の奇なる、殊更岩の上に老松幾株翠を凝せる、水の幾派にも分れて流るゝ、固より此彼に優るとは云ひがたきも、彼終に此が兄たりとは却つて仲々に稱しがたし、ましてや、寢覺は幾千の山阪を超えて後漸く到るを得べき境なれば、都會育の老人女姓には難義なる地なれども、此地はかゝる好景の常として、里遠きところにあるものなるに引かへ、絹足袋穿た柔弱男にもいと容易すく駒下駄掛けにて行かるゝやうな市街（一の關）近く、道好きところに在るは眞に稱すべし、爾のみならで、今は葉時なれど櫻の樹さへ少からず見ゆれば、花時の眺望如何に清絶美絶なるらん、想ひやるだに松の翠の間を佐保姫の刺繍して出す櫻花、甲所に一簇の雪、乙所に一團の白雲と現じなば、流れも巖も一倍の光彩を發して、水妙香を傳へ石落紅を點ずる風流、實に賞するに足ることなるべしと想はる、松島は大にして麗、嚴美は小にして奇なりなど、日本三景の一ともいはるゝものを比較にとりて、松崎復が溪橋の碑に記せしは、些過ぎたる歟知らざれど、此景で客舍さへ寢覺の「たせや」ほどのがあらば申し分な

し、確乎とした試驗せしにはあらざるべきか、河中に溫泉の沸き居るよしなる故、若し此の地にして修禪寺の如きに至らば、妙益々妙、大厦高樓も頓て出來んが、左なくとも蓋し客舍は追ひ〳〵好くなるべし、水の音好く松の聲好く、蛙の歌好く月も好し

實にこの溪の勝概を言ひ盡したるものと謂ふべし、若し夫れ蒼岩の邊碧水の上、櫻花の亂發するありて殘雪斷霞の點綴するの時に及ばゝ、人間を距ること更に迢かなるを覺ゆべし

徘徊すること多時、更に天工橋を度りて溪畔の一酒店に入り飯酒を命ず、飯もなく酒もあらず、僅かに鷄卵を覓め得て之れを茹せしめて食ふ、終に愛を割いて一の關に行かんとし、先づ路程を問ふ、飯店の少婦答へて曰く、十有二里と、余大に驚く、然れども如何ともする能はず、咨が鼻より杭打坂を上り、田隴水樹の間を行き花川戸を過れば簇々數百家、これ一の關町なり、始めて知る、此の邊の人六町を一里となす、少婦の十二里といふもの實は二里のみ、乃ち一嘘を發す、終に磐井川を度り、市廛の間を行き停車場に至る

八龍が湖、雄鹿の島

奥北の一名區○八龍湖○土崎○槻の岐路○典農村○八龍神社○三倉崎○望湖亭○鮒と蝦○八龍湖の大景○狐舘○亡矩火○雄鹿島○足中草履○俚謠○大平城○古寺○鵜の崎○奇石○鹿子落○鐵淵○岩屋觀音○赤神社○大磴○島廻り○帆掛島○龍像島○大瀧○御幣島○大小數十島○阿字が島○篩雀窟○篩雀窟記○白絲瀧○鐵が崎○蓬萊島○湯本溫泉○蘇武澤○八龍湖より雄鹿に至るの道は記中に在り、土崎港より雄鹿の八龍橋に至る凡そ五里、八龍湖畔三倉の鼻に望湖亭あり雄鹿島の湯本に暢神舘あり松川村金川に三層樓あり島の北岸は沙路、馬すべし島の四周多くは峻路、躋攀の具に富みたるもの能く行くべし

八龍が湖、雄鹿の島、湖の勝は江州琵琶の湖に優り、島の勝は實に陸前の松島に超乘す、共に奥北の名區なり、然れども其の地の遍陬に在るを以て未だ大ひに世に顯著ならず、而も一たび游ぶものは籍々として其の勝概を稱美す、賴三樹の奥北周遊の時、この湖に浮び此の島を見て歌ふて曰く、鴨村々下仙橈を借る、峭碧奇青海朝を出づ、蜃樹陰冥にして老麋睡り、洋風空濶大濤驕る、窟は鮫殿を開ひて黑ふして底なく、石は龍身を卷いて天に橋あり、男子一たび雄鹿の島を探りて、松洲始めて覺ゆ

妖嬈に屬するをと、亦た詩人の啞喝にあらず、八龍の湖は、羽後の能代と、土崎兩港の間に在りて、廣袤南北七里半餘、東西三里、周圍殆んど二十里、地角北より斜に細く日本海に斗出して其の端雄鹿の島となり、更に地角の南より出づるありて、島と合はざるもの僅かに數十間、以て日本海の潮流を吐呑す

土崎港は秋田市の東北一里三十町、土崎港の町より大久保驛に至るの間に中野村あり、路は兩岐となる、榎の岐路より入りて典農村に至る、平沙滿目甚はだ荒涼なり、『陸奥の他田の山は秋霧の立野の駒も近づきぬらし』の古歌あるところ、平沙の中、參差たる三十三碑あり、沙上に屐齒鞋底痕を亂印して畫は一條邐迤の路を作るも、一夜風吹き起るに逢へば行客屢々路に迷ふ、碑は其の路たるのところを標識する爲めに設けたるもの、防風林あり、典農村を過ぎりて八龍の橋を度る、橋の盡くるところ則はち雄鹿島

煙波縹緲たる八龍の湖、晴に雨に皆な詩美あり、其の全景を捺攬するのところは三倉が崎なり、今上曾て龍駕を駐めてこの好山水を賞でたまひしところ、旗亭に望湖亭なるものあり、屋宇高敞にして坐して一湖の勝

を觀るべし、鹿渡の鮒、水晶胎として美なること琶湖の源五郎に勝り、鵜川の蝦、茹してこれを割けば肉は束素の如く、味はひ尤も甘脆、川田甕江の撰するところ南面岡の碑の下に立ちて、騁望を擅まゝにすれば、鳥海の山は遙嵐の色鮮かに左に見え、眼前には青潤餐すべき雄鹿寒風の山長く湖中に涵す、露伴の記せる易心後語に『八大龍王の棲つべき漫々たる湖を瞰下せば、夕暮方の波烟り、茫々として漁舸を籠め、斗字に張り出て、乙字に彎れる、崎やら浦やら田甫やら、陸地の都て青々たるも、他所に類なく、優しき景にて、あはれ一句をと枯腸を搾れど、滿目の詩趣に一念空しく混沌として取り出で云ふべき言の葉もなく、假令芭蕉に句ありとも我首肯じと思ふのみなりき、一日市に近つける時しも、大陽爛々として雲に紫金の笹縁付けつゝ、萬頃の波の果に暮れ行けば、山色水光一呼一吸の間に變り〳〵て、壯絶美絶　又幻絶、稲田に落つる我影の丈六丈七丈八と見る〳〵延びるも最淋しく、實にや佛家の觀法に落日觀を始めとせしも所由ありけりと思はれて、惚れ〳〵と西の方を瞻望るに、何に感ずるとは無けれども唯だ乾坤の玄機に擊たれて、胡念亂想心窩を去り、車の走るも我が生けるも何時しか忘れて恍焉と、未だ知らざりし不可說の樂しさを覺え、後にて思へば狂氣らしくも不覺の涙を浮べぬ、此の日接せし人は皆な質朴にして善良なりければ、寢心さへも寛なるが如くなりき』と壯絶美絶、又幻絶と露伴が稱せるこの八龍湖は、更に許多の詩料を貢獻するなり、春夏の交、白氣空中に生じ、雄鹿の島かけて虹の如く、中に依稀として人馬の徂徠、山川林丘、樓觀臺榭の參差を現ず、其の現ずるや多くは平旦風なきの時に在り、曙光の東天に潑するの時に至り、澹として有無、倏忽にして見えず、或ひは月明らかに星稀なるの夜に現ず、人呼んで狐館といふ、蓋し海市ならんか、更に盂蘭盆の節の夜、湖上に火光を見る、煙波の上に浮游し、或ひは遠く或ひは近し、燃えて曉天に至りて乃はち歇む、人呼んで亡靈火といふ、筑紫の不知火の類、打魚の舟夜る湖上を行くもの、時に燐光の紛々として珠璣を撒するが如く、來りて簑笠を撲つありといふ

典農村を過ぎりて八龍橋を度れば、則ち雄鹿の島、島は南西北の三面海に瀕し、東八龍湖に面す、島といふといへども東北に沙路一道長く延いて山元郡に接す、廣さ東西七里、南北五里、中央に山阜あり、古木森然、

島を匝りて奇勝多し、應接に遑あらず、桓武天皇の延暦年間、坂上田村麿、東夷の巨魁大瀧丸と河邊郡の女々木岳に戰かふて大いにこれを破り、追擊して大平の邊を過ぎ、終にこの雄鹿の島に封鎖してこれを鏖殺したるのところと、今猶ほ往々にして山中草萊の中に石鏃を出すといふ、島の人敦朴無文、甚はだ耕漁を勉む、常に宛かも馬鞋に似て草履の一半を缺きたるもの足中といふを穿つ、僅かに趾を掩ふに過ぎず、踵は全たく地を踏む、蓋し犖确たる石路を走るに便なるが爲めなり、人と語る其の聲甚はだ高し、浪打聲といふ、常に驕濤の中に相話するを以てなり、春秋の社日、鎭守の祭禮及び冠婚置酒の時、若くは打漁の時、若くは耕耘の時、曼多羅歌なるものを歌ふ、優雅にして古樂の遺風あり

『聲はすれども姿は見えぬ、それかあらぬか蟋蟀』

『銀の柱は黃金のたるき、錢と小判のこけらぶき』

『愛は日に添ふ桐火鉢、人は思ひの下にたく』

橋を度りて游屐の先づ印するのところを船越の村となす、八龍神社あり、八龍湖の神を祭る、西して脇本の村に至れば、大平の古城趾あり、安東五郎脩季の居城、後地の大いに震ひしの時、城崩壞す、而も尙ほ隱々として城地の形を見る、月照山極樂寺あり、海藏山大龍寺あり、雲濤の上遙かに鳥海山の翠鬟を見る、極樂寺は古林幽寂、慈覺大師作るところの阿彌陀佛、白衣大士及び地藏佛を置く

鵜の崎に至れば、清波來り洗ふ二十餘町、潮淺くして奇岩棊布し、其の幾十なるを知らず、潮高きの時は澎湃として狼雨を飛ばし、波寂寞として回り去るの時、水晶盤上に敲敗したる剩白殘黑の相倚るの看となす

臺島村の雄島、雌島、蛭子越、龍が崎、奇勝應酬に遑あらず、更に椿の村に入れば、能登山の邊に椿樹多し、花さくの時、山燃えんとす、雙六の灣、斷崖二十餘丈なるものあり、鹿の子落しといふ、下瞰すれば人をして毛髮を竪たしむ、安倍千壽丸の舘址あり、安東五郎の亡ぼすところとなる、鹿の子落し一に御前落といふ、疑がふらくは是れ千壽の身を投じたるところか、岩の奇なるもの甚はだ多し、巨鱷の唇を開ひて齒牙全たく露出するが如きものは鮫淵岩、岩陰に小祠を含めるもの是れ辨天が岩、小濱村の岩窟觀音、窟中三十三佛あり、海には琵琶石、帆掛島の奇巖多し

門前村の本山神社は本山の中央に在り、仁王門の金剛力士は運慶の作る

ところといふ、大堂は本山の本廟赤神堂なり、藥師如來を安置し十二神將を配す、結構壯嚴、廟前の大磴道は赤神の鬼を役して作らしむるとて數牛の力をもつてするも推挽すべろと傳ふ、巨巖を壘みてこれを成す、

からざるの石あり、山頂に至る凡そ二里、其の巔を極むれば日本海の雲濤を望み、鞆鞨高麗と氣息を通ずるを覺ゆ

是に於て舟を門前村の漁家に僦ひて、所謂島廻りなるものとなす、而も日媚風恬の時にあらざれば不可なり、先づ帆掛島、小滚と鹽瀬崎との間なる海上に在り、高さ六七丈横さま三反ばかり、大帆の風を孕むが如く海風これを吹ひて習々として聲をなす、尤も奇觀をなす、鹽瀬の崎の亂礁亦た觀るべきもの多し、中に龍像岩あり、奇峭にして挺立すること十餘丈、勢ひ游龍の如し

本山の溪水海に落るのところ大瀧を成す、高さ二百餘尺、淙々として海に入る、近く三階松岩、五重塔島あり、御幣島は唯だ三十間許の一片石のみ、海苔を生ず、長さ三四尺に及ぶものあり、海苔中の絶品、香味甚はだ美なり、御幣海苔の名人口に膾炙す

經が島、大舘操、小舘操、福立島、龜の塚、孔雀岩、鋒立島、烏帽子岩、

夕跼窟、舞臺岩、甲島、白子島、閻魔島、而して蝙蝠窟、髮水の瀧、舟はこの各個各樣の景物の間を過ぎりて、終に阿字が島に至る、平石波上に出で波と相距ること尺餘、筌師毎に舟を此の島に繫ぎ、客は石上に箕居して携さふるところの肴核を出し、四水の好風景を看る

筌雀の窟は海に面して峭壁駢び立ち、六摺の屏風を排列するが如し、翠屏の間に舟を浮べて行くこと三十間にして窟口、高さ二丈有許、幅もこれと相應ふ、大石磊落、人の帽廂に迫る、舟して更に窟に入る、岩の色玲瓏にして潤黄、鐘乳を垂るゝが如し、陰寒の氣森然として人の胸臆に吹徹するを覺ゆ、入ること二十餘間にして沙磧あり、日光漸やく微、冥冥にして黄昏の如し、左右に兩坑あり、右は淺、左は深、左は深さ三十間ばかり、二人袖を聯て行くべからず、火を執りて中に入れば黄泥あり脛を沒す、其奥を極むべからず、橘南谿のこの筌雀窟を記するを讀むに曰ふ

出羽秋田の城下より北東に海中へさし出でたる地あり、遠く望めば嶋山の如し、是を男鹿山といふ、堺の住吉の浦より淡路島を望むが如し、此地は同じ出羽國にても、格別の地にて、種々産物も多く出づる中に、

材木の内殊更杉の大木多く世上に秋田杉といふは此山より出づるといふ、風景も他に異にして、其中に篭雀の岩屋といふあり、此山上に祭る所の神五座、内一つは漢の武帝を祭り、一は蘇武を祭る、外の三社は我邦の神なりといふ、此の地の海向ひは、匈奴の地にして蘇武が牧羊は此の男鹿山といふ、いつの頃よりいひ來ることにや、されど珍らしき事なり、附會の説ながら、此の邊の風土氣候にては蘇武がことも、さもありなんといふやうに思はる、夏の頃は秋田港野代邊の人舟に乗り、島廻りとて、此の山の麓を廻り、色々の奇境を探ることなりとぞ、されど少しにても風波あれば至り難きところなり、又庄内と秋田領の境にも、女鹿といふところあり、男鹿と相隔つること二三十里なり、男鹿女鹿といふことも由來あることのよし、彼國の人語れり、扨此の男鹿山の内にて第一の奇境といふは、篭雀の岩屋なり、山の麓海面近きところに洞あり、八月の頃海潮高き折を見合せ行く事也、潮洞に及ばざる時は、絶壁にて至りがたし、潮高く此の洞に及ぶ時に、小舟に乗り替へて洞穴の中に舟をさし入る、半道ばかりにして自然と洞の中明らかになり、漸やうと潮淺くなり、舟進みがたき時、舟より下りて

猶奥深く入るに、次第に洞穴廣く、細かなる沙、清らかにして、後には潮も至らず、陸地となり、遙か向ふを視れば、天地明かにして遠山連なり、樹木うるはしく、人家のごときも見え渡る、其の景色別に一世界と覺ゆ、此の地に遊ぶ人は、猶奥深く尋ね到り見んと心ざし行事なれど、此邊まで入りぬれば、さすがに行先もおぼつかなく歸路を失なはんことを恐ろしく、又乘り捨て置きたりし船をも思ふが故に、かの洞の廣くなるあたりより先へはつひに至り見る人なく、足早に歸り出づると也、此の邊の人の考がへには、其の見え渡る遠山も人家も別の世界にはあらず、男鹿山の内か、又は秋田邊なるべしと、さもありなん、されど兎角山の姿此の國にて見馴ざるやうに思はるれば、所謂仙境にてもあらんといふ、我遊びしは八月の頃ならねば、此の洞中に入り見ざりし、いと殘り多し、

篭雀窟のほとり、海中の岩礁に通じて二道の危棧を通ず、船して其の下を過ぎるべし、櫻が瀧、五ヶ一濱、船隱し穴、海潮盤渦して船を呑んとす、更に白絲の瀧あり珊々として海に入る、鑰洞、洞は三口を開き數千人を容るべし

南濱門前村より北濱加茂に至る凡そ二里、更に加茂より戸賀に至る、亦た畫中を行くが如し

鐵が崎、魏峨たる大石穹窿をなす、岩の色純紫あり雪白あり、流雲斷霞の摸樣を描き成す、海中に雄踞する蓬萊島、これを匝りて皆な奇岩、一々算ふるに遑あらず、戸賀の灣に至る、雄鹿島の要津なり

湯本村に溫泉ありて湧く、暢神館あり、星辻の神社あり、山門の金剛力士は田村麿の寄進したるものと稱す、千有餘年の風霜を經て彩色剝脫し、眉目彷彿として無からんとし、唯だ滿身の木理露出して、波樣を作すを見る

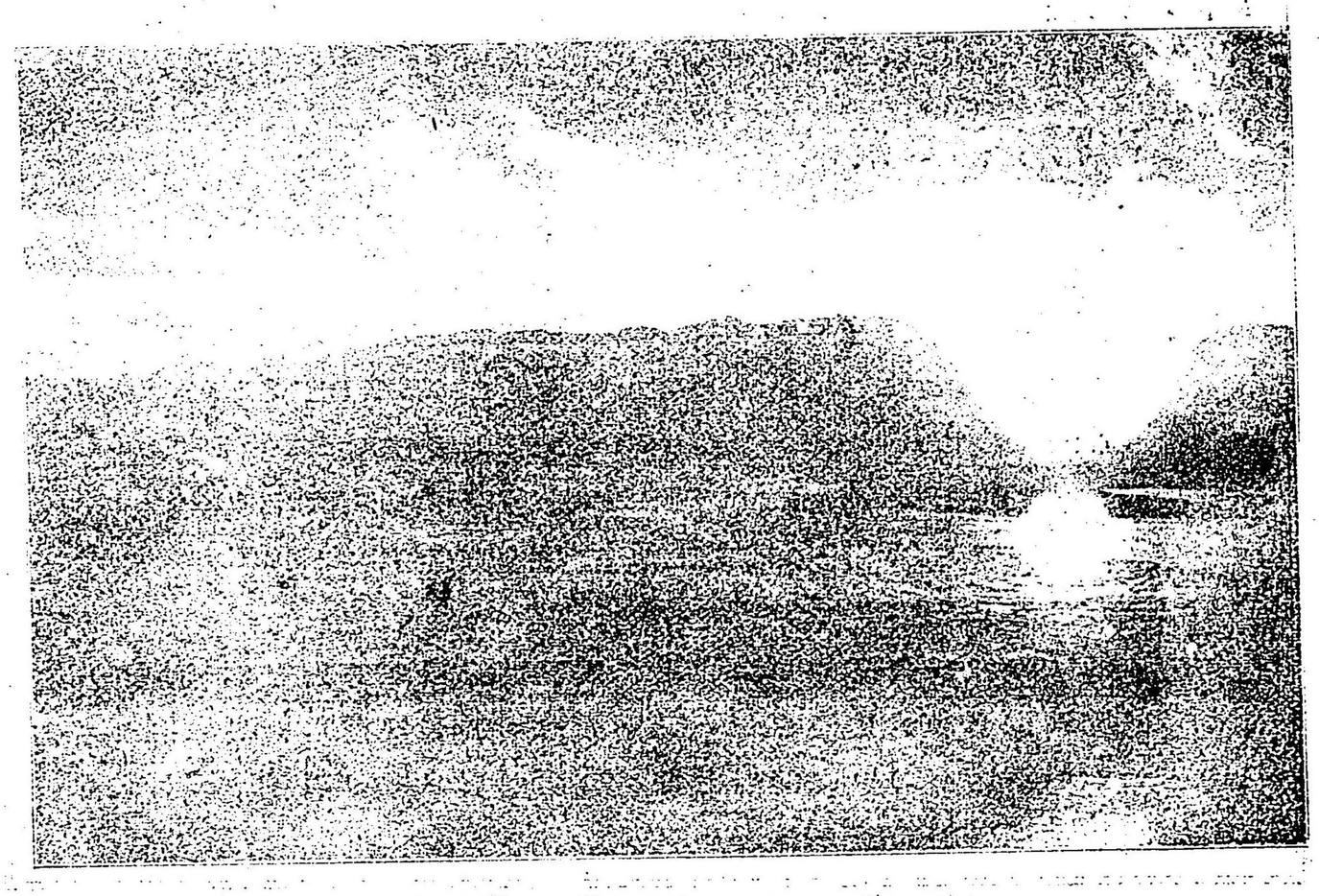
寒澤山の頂上に登れば、八龍湖の煙波は掌上に弄すべし、山の麓に蘇武澤なるものあり、四大石幷び立ちて洞窟をなす、今は土壞れて石顯はる、傳へ曰ふ漢の蘇武、單于の爲めに移されて羝羊を牧せしのところと、荒唐笑ふべし

凡そ雄鹿島の勝、誠に是れ神工鬼斧、言へば則ち眞を失なふ、乃はち唯だ某の山、某の水、某の岩、某の廟、某の瀑の名を誌すに止まる、若し夫れ島の北、日本海に面するところの荒磯を行くに、大濤甚だ狼藉、馬に騎して沙濱の上を走る、銀山崩れ來りて腹馬を打たんとす、壯快なること甚だしと

房總一帶の海岸

鹿野山○九十九谷○鳥居崎○金谷海岸○保田○鋸山○日本寺○呑海樓○石佛○通天閣○三峯○那古寺○船形觀音堂○北條、館山○和田○太夫崎○波太島○鴨川○天津○淸澄山○小湊の誕生寺○興津○勝浦○小濱の八幡山○長者町○玉前神社○九十九里○銚子港○黑生崎○犬吠岬○犬若島○仙が岩○木更津より館山に至る金谷、保田、勝山、豐岡、船形、那古、北條皆な東京鑑岸島より瀛船あり旅館の重なるもの鹿野山には呦々館あり勝山より北一里に岩井海水浴あり那古には山田屋あり北條には吉野庵、木村屋あり、東海岸は隨處に海水浴場あり鴨川の吉田屋、天津の井筒屋蓬萊屋、其他銚子街道の諸邑及び銚子港には旅館多し、犬吠岬には曉鷄館、あり、到るところ海魚の美に娶くべし

房總の半島、海に斗出すること二十餘里、其の岸大平洋の洗ふところとなる、故に勝地は每に海濱に在り、邈古より以來風濤日夜に濯激するところ地骨全たく露出して岩礁瑰奇なり、海山既に畫の如し、更に詩の如き漁莊蜑舍ありて其の間に聯絡す



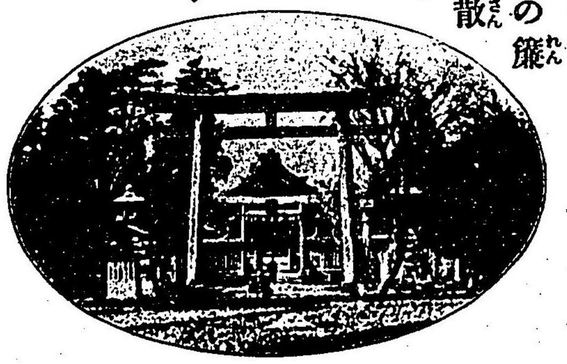
銚子之落暉

欠

MISSING

醐帝笠置山に幸し、師賢をして帝と稱し衮服して叡山に詣り僧兵を攝せしむ、一山の僧兵皆な踴躍す、會ま山風一陣御輦の簾を吹き簸る、僧兵乃ち其の帝にあらざるを知り四散し、師賢終に北條氏に捕へられて此に配置せらる、終に薨ず、孤墳空しく寒煙荒草の中に埋歿すること六百年、刀根川は近く半里のところに在り、江水舊に依つて千古碧なり

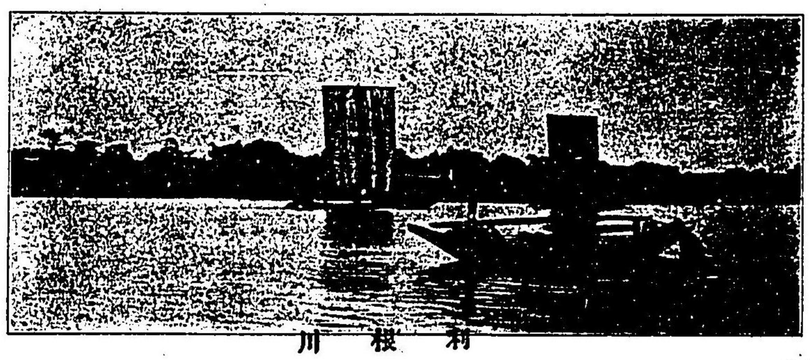
已上三四のもの、名勝といふにあらずといへども、人口に膾炙せるのところなるを以て、「房總一帶の海岸」の後に繫記す、



小帝神社

筑波の東濱街道

土浦○筑波山○筑波神社○みなの川○御幸の原○男體山○女體山○高天原○奇石○石門○水戸市○好文亭○弘道館址○大洗○磯前神社○平潟○藥師堂○八幡祠○勿來關址○波立の藥師堂○波立岩○相馬泉澤の古墳塲○松川○十二勝○上野より瀧車、總常二州を横りて岩沼に至り東北線に合す、土浦停車塲より筑波までは六里にして近し筑波の町には山中に相



川根村

〔愈しからぬ旅館あり水戸は常州の首邑、旅館の佳なるもの鈴木、麹屋、伊勢屋、芝田屋、森川屋等、別に常磐神社の畔に二三の旅亭と温泉宿あり、津の國屋好し、大洗は水戸より三里、舟にても車にても至るべし旅館と料理屋とを兼れたるもの魚來庵、金波樓等あり、平潟にも其の好風景を座間の下物として美き酒鮮なる魚を供する旅館多し、平町、中村皆な磐城の名邑なれば旅中の不自由を感ずることなし

雲際の雙鬢、旦には藍を曳き夕には紫を凝し、靄然として遠くより來り親しみ、人をして覺えず長揖せしむるもの是れ墨水坡上に看るところの筑波山なり、筑波の山は常州筑波の郡に屬して、其の脚は眞壁新治の二郡に跨がる、上方は二峰となる男體山といひ女體山といふ、遠く望めば馬耳の雙び立てるが如し、流車既に土浦に至る、士浦は霞が浦の西濱、市廛賑盛なり、前に霞が浦を望む、平汀曲浦、幾灣の風煙甚はだ佳賞となす、遙かに日光の山に對し、近く筑波の峯を看る、雲を傳し霞を點じ、明星の撒花響、紫嵐の輕羅裳、日夕

來り涵して容つくるの明鏡となる、土浦よりして小田、小田よりして北條、北條よりして筑波町、其の間六里許、道路平坦にして車を通ずべし、山下に至りて車を捨て長林の中に入り、上ること十餘町にして一大石華表を得、華表の中旅館商舗櫛比して山中一の小繁華を作す、磴道を上ること七八町にして筑波神社あり、殿堂華麗なり、諸冊二尊を祀る、寺あり知足院といふ、大佛堂、三層塔、鐘樓等あり、三層塔の前を過り左折して又山に入る、老樹天に朝し仰いで日影を見ず、林漸く疎に、濶然として望み豁く、冷泉あり、潺々として湧く、竹筒を架してこれを導びき、小溯の中に落す、札して「みなの川」といふ、後人の古歌に附會したるもの、掬して之を飲むに清冽にして氷を含むが如し、更に行くこと十數町、山少しく夷に出の地は所謂る御幸の原なるもの、騁望すれば加波、足尾、大平、小田の

下總香取神社

*茶亭あり、依雲といひ、迎客といひ、游仙といひ、向月といひ、放眼といふ、力餅も賣る、此

諸山は波濤の如し、仰ひて見れば雌雄兩峰嶸崢として天を衝く、先づ雄峯よりして登る、路頗る險なり、間々岩を穿ちて鐵鎖を懸け、躋攀を扶く、既に登りて其の巔を極むれば、小祠あり伊弉諾尊を祀る、浩茫として極目際なく、遠くして銚子、霞浦、汀浦縈回紛糾し、總房の山遙碧描くが如し、

御幸の原に下り更に雌峯に上る、石皆な犖确し樹皆瘦癯す、半腹以上は多く石のみ、樹木稀少、頂上に至る、小祠あり、伊諾冊尊を祀る、卓然として削成するの一高峰角は、これ所謂る高天原なるもの、鐵鎖を猿攀し藤梯に蝸附し終に登る、八州の山川襟帶の勢ひ、全たく雙眸の中に集る、雌峯の中岩の奇なるもの甚だ多し、巨舶の如きものあり、入船出船の岩といふ、大面にして烏巾、囊を肩にし槌を手にし欣然として微笑するが如きものは大黑岩なり、巨人の手を戟にして立が如きものを雷神岩といひ、大石路を奪つて下に小竇を作り、人皆な匍伏して行くこと十數歩なるを胎内窟といふ、而して其の尤も奇なるものは石門となす、峭崖の上、一大石あり、高さ二十間許、横さ九間、兩邊、崖を壓して懸る磊落奇瑰將に墜ちんとす、其の下才かに一人を通すべし、過るもの皆な

氣魄を動かし疾歩して行く、俗間に傳ふ、僧辨慶曾て此を過ぎりて逡巡すること七次、遂に過ぐと、辨慶七戻りといふ、山の勝此に終り、下りて御幸が原を過り筑波の町に入る、

瀧車千波の湖に傍ふて走りて水戸に入る、水戸は曾て東國文學の淵藪、英主に義公烈公あり名士に藤田東湖あり、上市、下市、中に水戸城を挾ひ、市街繁盛なり、烈公の作るところ所謂る偕樂園は千波湖に於ける常盤神社に隣る、今は公園となり、第一公園といふ、園内青蕪煙らんとし、上の梅樹を栽ること數百千株、木多くは古り花時甚だ美觀、好文亭あり、曾て烈公の燕居したるのところ、結構雅古にして喜ぶべし、亭の中に茶室何陋庵あり、何陋庵の木額は烈公の自書自刀するところ、前砌苔厚く石老ひ、石燈籠は大同年間の作、老蒼愛すべし、樓を樂壽といふ、欄に凭て眺望すれば千波の湖を隔て翠が岡に對し亦た好風景なり、庭には好木あり佳石あり、石矼其の間を迂餘して南崖に至る、亭榭あり石棋を置く、仙奕臺といふ、所謂偕樂園の碑は好文亭の左、數十歩のところに在り、常盤神社は義烈兩公を祀る、神樂殿に置くところの大鼓は烈公の作るところ、銘あり、

元の弘道館は今の第二公園の在るところ、幼稚園となる、弘道館の講堂は獨り舊觀を改ためず、大廉の下『遊於藝』の大遍額を懸く、園内、梅を栽ると數百株、中央に六角堂あり、内に寒水石の弘道館碑を置く、高さ七尺三寸、幅六尺、花時、萬梅照し來りて瑩然として朗明なり、常盤村の二十三夜祠後の墻間に東湖の墓あり、題して表誠之碑といふ、烈公の書

するところ、

舟を僦ひて那珂川を下り、那珂の港の對岸祝町に至り、更に海濱を行くこと二十町にして大洗に至る、別に下市より車を傭ひて磯濱街道を行くも三里にして達す、大洗の岬は海中に斗出すること數町、汀に奇礁あり、濱に亂松あり、松に倚り波に枕んで旗亭あり、海水に浴するが爲めに夏時客の來るもの多し、太平洋の波瀾來りて岸を打つ、日出の時尤も美觀、雲濤千里直ちに暘谷に至るかを疑がふ、危燈海に面して起る、上に磯前神社あり、大巳貴命、少彦名命を祀る、祠後は平沙雪の如く上に低松を生ず、烈公の『萬世を松に契りて今日までは子の日の松にひかれきにけり』と歌ひしところ、子の日の原といふ、

水戸より北、常盤鐵道あり、驛亭十數、多く海岸に傍ふて走る、海碧く

沙白く風景廣濶なり、關本より瀛車を下る、車を僦ひて平潟の灣に至る、其の間一里ばかり、

平潟の町は碧灣を控へて青嶂を負ふ、岸に傍ひ水に駕して棧橋を作る、

蜀の棧道の圖を見るが如く風景愛すべし、町の南端峭巖海に枕んで立つ、

藥師堂あり、岩角に在り、空外に懸るが如く、疎松其の傍に傍ひ堂下は

則はち碧水、甚はだ趣態あり、濱を傳ふて一隧道に入り灣の北なる八幡

宮に詣る、一水灣入して町と相隔て小半島を作し、長松の中廟宇の清雅

なるあり、『このあたり眼に見ゆるもの皆涼し』との蕉翁の句碑の邊に徘

徊して眺望すれば、雲濤縹緲として際崖なし、誠に曠世の懷あり、碧灣

を隔て、彼の藥師堂を瞰れば、來時の看に比すれば更に佳趣を添ふ、歸

つて隧道の中に少留してこの海山の景を看れば、山秀で水媚び誠に縮遠

鏡中の看をなす、灣に沿ふて酒樓あり漁家と相交る、

所謂る勿來の古關址は、勿來の停車場あるところの驛端に在り、平潟より路十數町のみ、車を關の碑の石摺賣る家の前に捨て、山に入ること數町、松樹扶疎の中に小祠あり、道祖神を祀る、祠傍の松下に關址の碑立つ、高さ三尺許、古木を桁にしてこれを支ふ、蒿墨を布き打ちて字を

寫すが故に碑面汚黑す、東に九面の濱を望み、黑浦の白波さながら雪の如きを見る、西は小峰起伏して風物荒涼なり、飛花鎧袖に落ち、將軍惜んで拂はず、馬を立て轡を按じて『吹く風も勿來の關』と歌ひたるは此の邊か、今は一櫻だもあらず、櫻の化石といふを賣る、

流車既に磐城に入りて湯本驛あり、溫泉あり、曰ふ昔の所謂三函の湯是なるべしと、旅館あり旗亭あり、町の南に溫泉山あり、山に櫻あり又た楓樹多し、登臨すれば海山の勝雙眸に集る、

平驛は、中村と共に濱海道の名邑なり、七月の盂蘭盆節、町の人異裝して鉦鼓を鳴し歌ひ且つ舞ひて市街を横行す、所謂る『ぢやんがら念佛』なるもの是れなり、其の唱ふるものに曰ふ、

はアははい、めエへへへえ、ようはほえー、

風調やゝ蠻音を帶び、聽くものをして笑はしむ、女天下、空ッ風、鹽辛、ぢやんがら念佛は此の地の名物とぞ、

平町を距ること西の方二里、赤井岳あり、赤井村に在り、山中に常福寺あり、赤井の藥師といふ、毎夜龍燈あり、海上より來りて大樹の枝に懸ると、曾て之を看しものあり語つて曰く、夜初更、滄海の上に火光あり

て浮び出で、竈川を泝ぼりて、個々相逐ひて山を望で飛び來り、其の幾百なるを知らず、月夜は其の光微なれども、暗夜は光り炬の如しと、七月七日の夜、龍燈尤も大なり、此日賽客山に溢れ、曉きに及ぶも散せず

といふ、平驛よりして四ッ倉の驛なり、四ッ倉停車場を下りて、行くと半里にして波立の藥師堂あり、路より右折して海濱に下る、一水路を奪ふ一橋あり、度りて林間を行けば則ち藥師堂なり醫王山波立寺といふ、

仁王門あり、門を入る一境清淨、梵唄噤默し、濤聲獨り寺を專らにす、堂は四方五間茅葺なれども頗る古雅、堂に大同元年海中より出現したる瑠璃光如來を安置すといふ、堂を下りて岸巖の下に立ては、太平洋の波遠くより來り激し漫天の飛雨を作る、左は遙にとりかみの岬に至り、右は寺の背の山嘴一たび海に入り再たび欹だちて數丈の巨巖、波立岩となるのところに至る、古歌の所謂る木奴美が浦、巨巖の邊亂濤尤も狂暴、聲は雷霆の如し、人をして心膽を寒からしむ、風景甚だ雄偉なり、四つ倉よりして久の濱驛、富岡、浪江、小高、相馬の原を過ぎて原町に至り更に中村町に入る、此の間、幾個の隧道あり、忽ち明、忽ち暗、海と送迎す、風景は常磐線中の第一なり

泉澤の古靈塲

浪江の北、泉澤に泉澤の觀音あり、蒼蜂を削りて上に佛像を彫刻し、彩繪を施す、雨淋風煽幾百千年を歴たるを以て繪彩多くは剝落し、佛も亦依稀として有無ならんとす、然れども尚ほ昔時の壯觀なるを憶に足れり、凡そ窟に前窟、後窟あり、前窟の藥師彫像は高さ丈餘、夾侍の十二善神、高さ各八尺餘、阿彌陀の彫像は、亦た高さ丈餘、夾侍十二善神、長さ各六尺餘、

後窟の千手觀世音、彫像は、高さ丈餘、夾侍の三十三身菩薩は長さ各五尺餘、更に千手千眼觀世音彫像あり、長さ實に三丈餘、蓮臺の幅三丈、二十八部童子長さ三尺餘と、今は眉目渾沌す、而かも奇古驚くべし、又た吉宗村に崛堂あり、亦た阿彌陀、藥師、觀音の像を絶蜂の面に彫刻す高さ各々八尺餘、舊記に徵するに、這等巨大にして瑰麗なる彫像は實に大同年間、僧德一の作るところといふ、德一は高僧なり、相宗を脩圓に學ぶ、義解に於ては人及ぶもの罕なり、嘗て本宗に依つて新疏を作り、傳敎大師を難破す、時人爭ふて之を傳ふ、

常州筑波山寺に居る、道風高傑にして門弟繁茂す、毎に時僧の奢りに過ぐるを見て甚だ之を惡み、躬から杜多の行ひをなし、弊衣破屐藿食藜羹以て晏如たり、後に慧日寺に終る、全身壞せずと、

想ふに東奥の地、昔より慓悍王化に霑はず、田村麿の征則を經て纔かに一時の鎭平を得しを以て、熱心なる僧侶は、此の機に乘じて、疎獷なる民心を開導せんと欲し、爭ふて奥州地方に布敎せしならん、大伽藍を建て、大佛像を作るは未開の蠻民を順導して其の耳目を新たにするに於いて大効益あれど、僻遠榛莽の地、輙すく大土木を起すの便なきが故に、天然の岩壁を利用して此の壯大にも人目を駭絶するの偉觀を成せしならん、想ふに德一の如きも、夷民開導の布敎師として異常なる感化力を有せる善智識なりしならん、之を彼の達谷の大日像と較ぶるに其の建立の時代殆と相同じ、

松川浦

松川浦は中村町より二里の處に在り、海水灣入して長江となる、碧波の上に幾多の小嶼あり、碁の如く布き星の如く列なる、沙の白きこと玉屑

の如く松の美なること剪綵するが如し、浦の門口たる鵜の尾の岬、奇巖欹だち立ち激浪霏々として白雨を作す、うつしゑも及ばんものかさくらさく水莖山の面影と歌はれたる水莖山、岩を削りて長磴を作り、右松離々の中に通ず、夕顔觀音堂崖腹に懸る、堂の製古雅、下に回潮あり、日華を反映し楣欄の邊に浮動の奇文を描く、松の翠またこれを彩る、堂よりして望めば左には大海右には遙山而うして脚下には小嶼處々に浮ぶが如く、漁舟は座するが如し、堂後の山に上り路の盡るところ削蜓數十丈波浪其下に激し聲雷霆の如し、所謂松川浦の十二景なるものは、先松川浦次に水莖山而して飛鳥の湊、松沼の濱、離れ崎、川添森、文字島、紅葉岡、沖が島、梅川、鶴巣野、長洲の磯これなり、舟を倩ふて十二本松に至るに、離島右に在り沖が島左に在り、矚望明媚、進んで『冬さむき水にも寫す文字の島やおくれし秋の雁のひとつら』と歌はれたる文字が島に至れば繪も其の眞を寫すこと能はず、說かんと欲すればまた言を忘る、松島と併せて東奥の雙絕といふべし、

日本名勝記 上卷終

明治卅一年八月九日印刷
明治卅一年八月十三日發行
明治卅二年七月三十日訂正再版印刷
明治卅二年八月二日再版發行

日本名勝記上卷
實價金六拾錢

著者　遲塚金太郎
東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者　和田むゑ
東京市京橋區木挽町九丁目卅二番地
印刷者　中野鎌太郎
東京市日本橋區通四丁目角
發行所　春陽堂
電話本局五拾壹番
東京市京橋區築地三丁目拾五番地
印刷所　帝國印刷株式會社
寫眞印刷所　原田活版所
寫眞製版銅造　田中猪太郎

版權所有
●内に發行者の印書無き品は偽造品●

旅行日記

月　日（　曜日）天氣（　）寒暖（　）

訪往	詠草
訪來	
宿泊所	
食中	

收入	出支					
	圓	錢	厘	圓	錢	厘
	總計			總計		

旅行日記

月　日（　曜日）　天氣（　　）　寒暖（　　）

訪往

訪來

所泊宿

食中

詠草

入收

出支

圓	錢	厘	圓	錢	厘
總計			總計		

旅行日記

月　日（　曜日）　天氣（　　）　寒暖（　　）

訪往

訪來

所泊宿

食中

詠草

入收

出支

圓	錢	厘	圓	錢	厘
總計			總計		

旅行日記

月　日（　曜日）天氣（　　）寒暖（　　）

訪往

訪來

所泊宿

食中

詠草

入收

出支

圓	錢	厘	圓	錢	厘
總計			總計		

旅行日記

月　日（　曜日）天氣（　　）寒暖（　　）

訪往

訪來

所泊宿

食中

詠草

入收

出支

圓	錢	厘	圓	錢	厘
總計			總計		

旅行日記

月　日（　曜日）　天氣（　）　寒暖（　）

訪往

訪來

所泊宿

食中

詠草

入收

出支

圓	錢	厘	圓	錢	厘
總計			總計		

旅行日記

月　日（　曜日）　天氣（　）　寒暖（　）

訪往

訪來

所泊宿

食中

詠草

入收

出支

圓	錢	厘	圓	錢	厘
總計			總計		

旅行日記

月　日（　曜日）　天氣（　　）　寒暖（　　）

訪往	詠草	
訪來		
所泊宿		
食中		

入收	出支	
	圓　錢　厘	圓　錢　厘
	總計	總計

旅行日記

月　日（　曜日）　天氣（　　）　寒暖（　　）

訪往	詠草	
訪來		
所泊宿		
食中		

入收	出支	
	圓　錢　厘	圓　錢　厘
	總計	總計

旅行日記

月　日（　曜日）天氣（　）寒暖（　）

訪往	詠草
訪來	
所泊宿	
食中	

入收	出支					
	圓	錢	厘	圓	錢	厘
	總計			總計		

旅行日記

月　日（　曜日）天氣（　）寒暖（　）

訪往	詠草
訪來	
所泊宿	
食中	

入收	出支					
	圓	錢	厘	圓	錢	厘
	總計			總計		

旅行日記

月　日（　曜日）　天氣（　）　寒暖（　）

訪問	訪來	宿泊所	食中

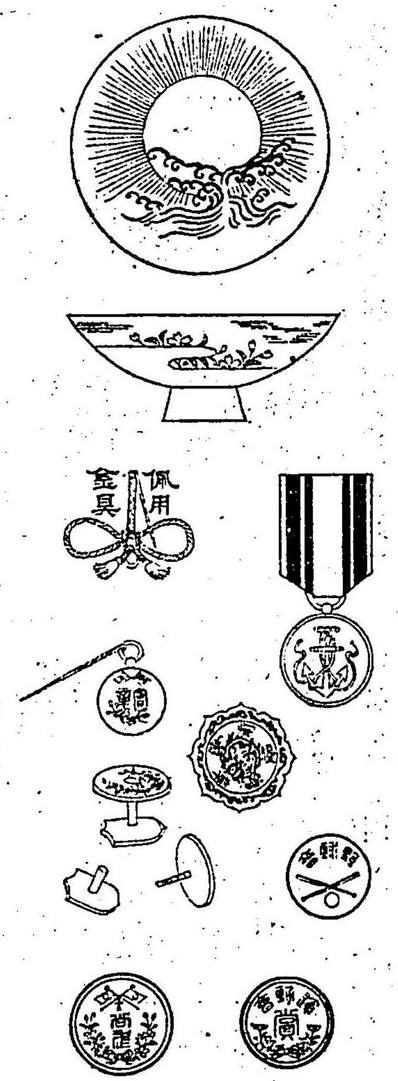
入	出	支
	圓　錢　厘	圓　錢　厘
	總計	總計

夫レ天自ラ助クル者ヲ助ク先哲ノ言動カスヘカラス我カ商會カ明治十年徽章賞牌ノ製造ヲ創業シテヨリ爾來日進月歩隆運ニ遭遇セシモノ豈ニ自ラ助クルノ古言ニ背カサルナリ試ミニ二十有餘年ノ昔日ヲ回想セヨ世上ノ商賈多クハ御用商人タラン欲シ百方盡力唯タ是レ御用ノ文字ヲ店頭ニ掲出スルヲ以テ能事終レリトスル者ノ如ク商權ノ獨立孤トハ夢想ニ當ラサリシナリ當時本商會ハ卓然自信ヲ以テ立チ毫モ時流ニ倣ハス公私立學校及實業諸團體ニ向ツテ販路ヲ求メ攻々汲々二十有餘年一日ノ如シ辛勞果シテ空シカラス遂ニ今日ノ盛況ヲ呈スルニ至レリ其販路ノ廣大ナル花客ノ饋多ナル枚舉スヘカラス學校各府縣私立學校及日本體育會及大日本蹴會各官業團體日本銀行及各銀行會社各府縣尚武會ノ員價値ヲ發揚スルモノ亦ヲ以テ事ニ從フ會ノ員價ヲ世ニ表スルモノ云フモ強チ過言ニアラサルナリ既ニ我カ商會カ自信ヲ以テ起チ信用ヲ以テ唯一ノ機關トシ勉強以テ事ニ從フ會ノ員價ヲ世ニ表スルモノ云フモ強チ過言ニアラサルナリ既ニ我カ商會カ自信ヲ以テ起チ信用ヲ以テ唯一ノ機關トシ勉強以テ事ニ從フ彰スルモノ外他ニ策ナシ夫レ商會ノ精神ハ斯ノ如ク遠大ナリト雖モ其ノ舉措態度ニ至ツテハ平民的ヲ以テ處スルナリ是レ店頭敢テ華美ヲ飾ラス店員ノ常ニ普通商人タルノ風采ヲ以テ事務ニ服スル所以ナリ彼ノ店頭漫ニ華美ヲ裝ヒ店員美服盛裝御役所風ヲ學ヒ地方客ノ信用ヲ釣ラントスル者ノ如キ淺薄ノ心事ト行爲トハ毫モ我カ商會之レナキハ又以テ花客諸君ノ夙ニ知ラル、處ナリ以上ハ我カ商會カ今日アル所以ト現時及將來ニ執ル所ノ主義目的ヲ略述シタルモノナリ唯タ言ノ當否ハ大方各位ノ試驗ニ任スルモノナリ

美術貴金屬品賞牌徽章金銀白銅木盃製造

販賣所

日本帝國徽章商會



龜印煉乳

クルミスンデンコしるしめか

創設廿五年紀念博覽會

有功銀牌受領

精良なる煉乳の顯出は小兒を持つ父母に取て是上なき幸ひとこそ云ふべけれ蓋し品質の精良と不良なるとは禍福の由て分るゝ所あればなり弊舗發賣の **龜印煉乳** は巧妙なる器械と熟練なる技師とに依て製出せられ品質の精良と滋養成分の豐富なると價格の廉なるとは因て以て江湖諸君に信用を博せし所以なり

發賣元 東京市下谷區池之端仲町二十七番地 寶丹本舗（電話本局五百卅九番）

地方弘賣 東京市日本橋區本町三丁目三番地 藥種問屋（電話本局五百四十番） 守田治兵衛 守田分店

温泉

鮮魚
御料理

上のゐん坂鶯溪
（電話本局七九六）

大廣間其他小座敷はなれ座敷等數間あり何れも空氣流通清潔にして庭園四季草木の眺めあり

野崎左文君、松原二十三階堂君著

日本名勝地誌

第壹編より取揃へ御注文に應ず

●第九編……北海道之部（●渡島●後志●胆振●日高●十勝●石狩●天鹽●北見●釧路●根室●千島）七月中旬發行

寒地といふと雖、之を歐洲諸國の都會に比するに、氣候尙暖にして、實に我邦北門の寶庫とも稱すべき北海道の新天地は、今や松原二十三階堂君が、其身親しく山河を跋渉せられし、實地の探査に依て紹介せらる。探勝の客は此書に賴て未見の山河に接し、實用の旅行者は此書に賴て未知の道路を審かにすることを得ん。請ふ一本を購ふて革嚢の伴侶となし給へ。

全部十二冊 洋裝美本 地圖挿入

正價●壹冊金參拾錢●六冊前金壹圓七拾五錢●全部拾貳冊前金參圓四拾錢●郵稅壹冊六錢●每編西洋木版寫圖入

日本名勝地誌 全部目次

●第壹編 十一版 畿內之部
●第貳編 九版 東海道之部上
●第參編 八版 東海道之部下
●第四編 八版 東山道之部上
●第五編 五版 東山道之部下
●第六編 四版 山陽道之部
●第七編 再版 北陸、山陰道之部
●第八編 南海道之部
●第九編 新版 北海道之部
●第拾編 西海道之部
●拾壹編 琉球之部
●拾貳編 臺灣之部

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 專文館

小說之部

紅葉山人著書目錄

弊堂が尾崎紅葉氏の作を乞得て江湖に紹介する久し。是を長編にしては三人妻多情多恨、是を短篇にして紅鹿子紙きぬたに至るまで氏が作としいへるものは茲に網羅して殆と剩す處なきなり。就中晩近の作金色夜叉は文辞の妙と釘装の美と二あがら世を驚して明治文界の特産とす

著工	書名	定價 郵稅
武內桂舟	伽羅枕	冊五錢 六錢
無名氏	戀之病	四十錢
富岡永洗	冷熱	三十錢
渡邊省亭	青葡萄	三十錢
武內桂舟	紅鹿子	十二錢
鈴木華邨	なにがし	三十錢
富岡永洗	心の闇	二十錢
三嶋蕉窓	笛吹川	三十錢
武內桂舟	隣の女	三十錢
仝	浮木丸	三十錢
無名氏	夏小袖	二十五錢
水野年方	不言不語	三十錢
鈴木華邨	紫 附琴	三十錢
省亭 年方合作	西洋娘氣質	十三錢 一錢五厘
	片ゐくぼ	三十錢

著工	書名	郵定税價
水野年方	三人妻	五十錢
富岡永洗	紙きぬた	廿六錢
武内桂舟	二人女	廿六錢
鈴木華邨	多情多恨	十七錢
武内桂舟	男心	廿五錢
全	文學世界 命の安賣	二八錢
諸大家揮毫四十個	俳諧名家選	廿五錢
武内桂舟	此ぬし	四十錢
貧学米僊	黄櫨匂	三十錢
俳畫入	金色夜叉前編	六十錢
月岡芳年	金色夜叉中編	八十錢
新案寫眞木版	八重襷	四十錢
河村清雄	心中船	近刊
諸大家畫揮毫數十		近刊

饗庭篁邨著書目錄

世相を穿つの妙、世態を觀るの明、篁邨氏が筆致は夙に世に知らる、今こゝに收るもの數種は氏が作中の傑作にして、滑稽あり諷刺あり世話物あり時代物あり何れも篁邨氏獨特の文字一讀其妙を賞へざる者なからん。

著工	書名	郵定税價
富岡永洗	笠之露	三十錢
三島蕉窓	きせ綿	二十錢
久保田米僊	凧の糸目	四十錢
月岡芳年	勝関	四十五錢
福地復一	有馬筆	三十錢

いへるもの語

十三錢 壹

村井弦齋著書目錄

現今村井弦齋氏が作を讀まざる人は殆ど之無かるべし、理なる哉氏が作の温雅にして平易なる、常に人間日常の事を捉來りて反復其行路の屈曲を指示す、妙其内にありて沿々數万言人小説たるを忘れ、又讀者たるを忘るゝに至る、今茲に集むる二十餘篇は氏が作を盡せるもの、猶其日の出嶋の大作は卷を重ねる六篇に及べり

著工	書名	郵定税價
鈴木華邨	小説家	四十錢
水野年方	鷲の羽風	廿五錢
富岡永洗	血の涙	三十六錢
全	櫻の御所	廿八錢
鈴木華邨	朝日櫻	廿八錢
小林永興	衣笠城	三十錢
富岡永洗	譽の兜	廿五錢
鈴木華邨	小弓御所	三十錢
富岡永洗	小猫	五十五錢
全	沖の小島	廿五錢
鈴木華邨	風船縁	廿錢
梶田半古	鎧の風	八十錢
鈴木華邨	川崎大尉	廿五錢
富岡永洗	深山の美人	廿錢
梶田半古	芙蓉峰	廿錢
全	飛乘太郎	廿五錢

櫻痴居士著書目録

經歴家として、小説家として、歌舞伎作者として、世は櫻痴居士を迎ふるに此諸方面より。宜ぐ弊堂ぐ出版おかゝるもの櫻痴放言伏魔殿の如きは經

著工	著名	郵定價
鈴木華邨	兩美人	三十錢
玉桂女史	町醫者	六十錢
玉桂女史	桑の弓	六十錢
鈴木華邨	日の出嶋 蓬萊の卷	六十錢
富岡永洗	日の出嶋 鶴亀の卷	八十錢
梶田半古	日の出嶋 高砂の卷	八十錢
武内桂舟	日の出嶋 住の江卷	八十錢
水野年方	日の出嶋 富士の卷	八十錢
三島蕉窓	日の出嶋 新高の卷	四十錢
筒井年峯	日の出嶋 老松の卷	近刊

歴家ぐ說き眼光に現社界の秘密を捉えきたり、秋の夕暮豐島の嵐は別に詩想の溢るゝばかりあるを見る。

著工	著名	郵實價
三島蕉窓	秋の夕暮	四十五錢
仝	櫻痴放言	三十錢
水野年方	浮世見物	四十五錢
筒井年峯	豐島之嵐	六十錢
富岡永洗	山縣大貳	三十錢
武内桂舟	櫻痴新編	四十五錢
渡邊省亭	夢か夢中	六十八錢
三島蕉窓	嘘八百	六十五錢
水野年方	伏魔殿	六十三錢
仝	もしや草紙	六十五錢

著工	著名	郵定價
富岡永洗	片輪車	二十四錢
武内桂舟	大策士	十三錢
仝	おもひく	近刊
渡邊省亭	春雨傘	六十錢

ちぬの浦浪六 著書目録

浪六氏が忽如として文壇ゑ雄飛するや伊達摸様の裾捌き、板金剛の力足、さては三尺無反の大刀ゑ天晴ある男の六法仰見て驚かざる者なし。茲ゑ三日月の鮮なるより後の三日月の物凄きゑ至るまで何れも明治の名物たらざるはなし。

著工	著名	郵定價
浪六自畫	三日月	二十四錢
省亭方年方合作	井筒女之助	三十六錢
渡邊省亭	奴之小萬	三十六錢
武内桂舟	鬼奴	廿五六錢
水野年方	破太鼓	廿五四錢
武内桂舟	夜嵐	廿五六錢
仝	深見笠	廿五六錢
水野年方	髯の自休	廿五六錢
武内桂舟	浪六漫筆	三十六錢
渡邊省亭	安田作兵衛	三十六錢
水野年方	後の三日月	二十四錢

塚原蓼洲著書目錄

武士の八十氏川の流清くして盡ざるもの今蓼洲氏の筆に在りて當代歴史小說家の泰斗たる名を擅にせしむ氏が作の老練にして氣慨に富める稗史の上に古英雄を捉來りて別に其性格と行爲とを寫す其妙到底他人の企及すべきに非ず

畫工	書名	郵税	定價
水野年方	最上川	三錢	六十錢
武内桂舟	山中源左衛門	八錢	五十錢
小林永興	淨瑠璃坂	六錢	三十錢
武内桂舟	北條早雲	十錢	十錢
自畫	嶋左近	十錢	四十錢
宮岡永泡	伊達正宗	十錢	八十錢

坪内逍遙著書目錄

世に春廼屋朧氏を知らざる人は未だ明治の小說を語るに足らざる者なり。氏が作は小說に脚本に評論に有ゆる文學界の方面に亘りて北斗の光を放てり即桐一葉牧之方菊と桐等は脚本として最も傑作の名あり又文學其折々は氏が數年來の評論を網羅して數千頁の大冊也。

畫工	書名	郵税	定價
鈴木華邨	桐一葉	三十八錢	壹圓小包料四百目
洋裝美本	文學其折々	五十錢	
小林清親	梨園之落葉	四十錢	六十錢
渡邊省亭	牧之方	三十五錢	三十五錢
鞆音年英	菊と桐		

森鷗外著書目錄

醫學博士森林太郎氏は鷗外漁士として文學界に大王の名あり。其靈妙なる筆は主として獨逸小說の美を紹介し、文學美術評論に於ては又玄妙の理高潔の想を發揮して、斯道の爲に盡す事大也。

畫工	書名	郵税	定價
武内桂舟	二こゝろ	八錢	八錢
洋裝美本	水沫集	十錢	六十錢
	かげ草	十四錢	七十五錢
	つき草	壹圓壹錢四百目	壹圓壹錢四百目

忍月居士著書目錄

忍月居士が小說に絶妙の名あるや久し、其著露子姫は當年洛陽の低價を貴からしめしもの氏が作中の傑作にして、惟任日向守は歴史に就ての意見を此英雄によりて發表したる著、又其夏祓は小品の美を集めて、可笑しきもの悲しきもの勇しきもの〻數を盡す。

畫工	書名	郵税	定價
渡邊省亭	露子姫	四錢	壹錢
三嶋蕉窓	惟任日向守	二十錢	四十錢
鈴木華邨	夏祓	六錢	壹錢
小林永興	文學世界 辻占賣	二錢	八錢

遲塚麗水著書目錄

麗水氏の文は恰も行雲流水の如し、或は高く重り、或は低く迷ひ、或は激越、或は沈靜、常に常規を以て測るべからず、是を以て記行に、小說に、人氏の文を愛して百誦猶飽かず。晚近の作にかゝる日本名勝記は最も得意の文字にして釘裝印刷の美又他に見るべからず。

著書名	郵定價	稅價
陣中日記（米仙米齋・三嶋蕉窓）	三十八錢	六錢
半月城（水野年方）	三十錢	六錢
大和武士（富岡永洗）	三十錢	六錢
さんざ時雨（三島蕉窓）	三十錢	六錢
照日之松	三十五錢	六錢

江見水蔭著書目錄

奇骨の稜々たると、詩想の清新なるとを以て水蔭子はスケッチ作者の名手たり其絢爛の美を極めたるを鎌わぬ坊となす若夫れ水の聲水車の二編に至つては特意の短篇數十を收めて結搆の妙文章の巧を擅にす。

著書名	郵定價	稅價
月夜鴉（富岡永洗・寫眞色摺）	三十錢	六錢
日本名勝記 二冊	一圓廿錢	十二錢
鎌わぬ坊（富岡永洗）	廿八錢	六錢
水の聲（年方・武內桂舟）	三十錢	六錢
水車	三十錢	六錢

三昧道人著書目錄

大坂城內一方の旗頭は洛東無名の一法師、其鉄牛は吼えぬ樫井ヶ原に、三尺の長劍一度鞘を脫すれば鋭利當る者ありとも覺えず、此人の名は何ぞ塙團右衛門。三昧氏が老練の筆は此英雄を寫して傑作の稱高く世話物に於ては目黑物語かつら姫等何れも金玉の文字たり。

著書名	郵定價	稅價
塙團右衛門（米僊合作・筒井年峰）	三十錢	六錢
鴉の浮巢	二十錢	四錢
海の秘密（小林永興）	二十錢	四錢
文學世界 野試合	十三錢	一錢五厘

正直正太夫著書目錄

奇矯を以て文學界に一異彩を放つは正直正太夫氏なり、其著油地獄は當年文界を驚倒せしめしもの、見切物は自ら此題を附するも江湖既に案上の珍寶として貴ぶ、氏曾て其著反古袋に序して曰く作家の爲にば買はずとも讀め書肆の爲には讀まずとも買へよと見るべし其筆の飄逸物に拘らざるを。

著書名	郵定價	稅價
目黑物語（渡邊省亭・小林永興）	三十錢	六錢
かつら姫	三十五錢	四錢
花寄團吾	十三錢	一錢五厘

眉山人著書目錄

着想の高潔、行文の艶麗、眉山人の作は世既に定評あり、其柴車の寂たる、網代木の幽なる、萩桔梗の華かなる、さては二枚袷の艶なる、大村少尉の勇しき何れも勵精刻苦の作ならざるはなし、氏が他流に傑出するもの夫れ偶然にあらざるなり。

畫工	書名	郵定	價税
武内桂舟	柴車	二十四錢	
武内桂舟 無名氏 小林永興	見切物 油地獄 文學世界 かくれんぼ	三十六錢 二十四錢 二十八錢	
全 全 水野年方 武内桂舟 諸大家	網代木 二枚袷 大村少尉 萩桔梗 もゝかより	二十四錢 二十四錢 三十四錢 二十四錢 近刊	

廣津柳浪著書目錄

精緻の文、深刻の想は柳浪子唯一の長所なり。其五枚姿繪は紙數三百餘頁、事家庭の平單を寫して筆人情の細微と穿つ、一人娘異り種女馬士に致ては此の慘、彼の酷、縱横描き來りて筆端魔あるを覺えしむ。

畫工	書名	郵定	價税
富岡永洗	五枚姿繪	八冊五錢	

漣山人著書目錄

筒井年峰　鈴木華邨　渡水野年方

一人娘	三十錢
異り種	卅五錢
女馬士	十三錢
だんたら染	一錢五厘
	三十錢

燒火箸は回を重ねる事五十、輕薄なる美人と、貞操の淑女と相對して彩筆流るゝが如く、奇想天外より來る觀あり。逢合傘は普通人間の弱點を寫して興味溢るゝばかりあり。

著書名	實價 郵稅
燒火箸	三十錢
逢合傘	六十錢

渡邊省亭　水野年方

幸田露伴著書目錄

文學世界　新知事　かたゝ糸

文學世界	八錢
新知事	十三錢
かたゝ糸	一錢五厘

露伴氏は當代小說家の泰斗、其作多からずと雖も、靈妙なる詩想は優に文壇に濶步して其名を擅ゝするに足る、有福詩人は氏が山間の詩仙と會して文を談ずるに偶して其主義を微かしたるもの、新葉末集は辻淨瑠璃綾耳鉄色の二編より成り、小菊集は日暮物說と滿壽姫の二編を收む。

著書名	實價 郵稅
有福詩人	三十錢

渡邊省亭

諸家著書目錄

書名	著者	定價	郵稅
日清海戰史	二葉亭作 華郎畫	八冊 五錢	
日清陸戰史	現友社作 蕉窓畫	七十五錢	十四錢
木戸松菊	全 年方畫	近刊	
かたゝ	全 桂舟畫	三十五錢	六錢
四之緒戀	嵯峨の屋 華郎畫	二十錢	四錢
五調子	讀賣繼賣 年方畫	三十錢	六錢
籠枕	水谷下倒 永洗畫	三十錢	六錢
文庫	川尻寶岑 永洗畫	六冊 五錢	十二錢
瀧口入道	小林永興	三十錢	六錢
枯野の眞葛		二十錢	四錢
會津戰爭夢日誌			

書名	著者	定價	郵稅
荒海實一	須藤南翠 米僊畫	六冊 三十錢	
朧月夜	全 永洗畫	八冊 五錢	
こぼれ萩	中村花瘦 桂舟畫	廿六錢	五錢
壽王冠者	松居松葉 華郎畫	三十錢	六錢
異郷夢友垣	末松謙澄 華郎畫	六冊 三十錢	
まぼろし	湖處子作 米僊畫	四十八錢	
大海原	末廣鐵腸 米僊畫	八冊 廿錢	
蝦夷錦	武田仰天 省亭畫	六冊 廿五錢	
木枯	市川新藏 桂舟畫	二十錢	四錢
花相撲	寄軒天彦 桂舟畫	二十錢	四錢
發明家	鶴川著 自畫	二十錢	四錢
不色一人息子	以心庵作 年峰畫	十五錢	十錢
鳴衝	二十三階 華仙畫	三十錢	六錢
東武士	逐波作 永洗畫	廿錢	四錢

山田美妙著書目錄

後藤芳泉
小林永興
鈴木華邨

書名	價	郵稅
葉末集	廿四錢	
新葉末集	三十錢	六錢
小萩集	六冊 五錢	十錢

冷蕭なる筆に人心の暗黑ある一面を寫したるものを敎師三味とおす。猿面冠者は豐太閤の胸中を鋭利なる觀察によりて、書現はされたり、然して氏の多能なる節用集に新機軸を出したるの著あり是實に万人坐右の寶典として欠くべからざるもの。

書名	著者	價	郵稅
猿面冠者	文學世界 小林永興	二八錢	

川崎紫山著書目錄

渡邊省亭
紙數七百
洋裝美本

書名	價	郵稅
教師三味	四冊 五錢	
新式節用辭典	四十八錢	十錢

紫山氏の史筆は東湖、南洲、甲東、松菊等近世英傑の傳を著して其人を紹介するに面目眞を誤らざるば世既に之を賞ふ然して廿七八年の戰史い氏の最も得意とする處あて、海陸戰記を傳ふる傍歷史的眼光と政治的判斷の別に一種の光彩を放つあり。

書名	價	郵稅
西郷南洲	四十錢	
大久保甲東	四十錢	
藤田東湖	五十錢	十錢

著畫者	書名	定價	郵税
岡本昆石 永洗畫	瓜太郎物語	四十錢	
探偵小説 大毒薬	春之夕暮	十四錢	八錢
一風子著	破窓之風琴	二十七錢	七錢
辻治之著	尊號美談	四十三錢	七錢
福知源一郎著	無名氏	二十七錢	四錢
森田思軒 玉桂女史	新機軸	六十四錢	六冊五錢
後藤宙外 永洗畫	ゐらら露帶	四十三錢	三十錢
同	錦記	四十三錢	三十錢
泉鏡花作 華邨畫	蛇いちご	六十三錢	三十五錢
小杉天外 富岡永洗	王冠	近刊	
長田秋濤 河村清雄	ふところ子	四十五錢	近刊
眉山鏡花 諸家畫	戀慕あがし	二輪	全
小栗風葉 水野年方	梅		
諸天家			

戰記之部

著畫者	書名	定價	郵税
名士肖像入	新三國誌	四十五錢	
川崎紫山	西郷南洲	四十八錢	
全	大久保甲東	四十四錢	
全	藤田東湖	五十五錢	
	名譽實錄 二冊	一圓廿六錢	小包料百目迄
樂眞子編 後凋生	古今史譚	一圓五十錢	小包料四百目迄
堀江中尉	南征史	八十五錢	
肝付少將	列國變局志	七十錢	
戸川殘花	幕末小史 五冊	一冊錢 一冊五錢	四五十錢 郵税各六錢

史傳之部

著畫者	書名	定價	郵税
坪内逍遙 水谷不倒	列傳躰小説史	七十五錢	十四錢
躑躅井ふく 玉桂女史	女子百傑傳	四十五錢	八錢
風流窠著 年方畫	名人逸話	廿五錢	六錢
上島笠山 淺井忠畫	釋元恭	廿五錢	六錢
横井雪庵	高僧譚	廿五錢	六錢
全	鼠貧競	廿五錢	六錢
寫眞挿入	忠魂帖	廿五錢	六錢
冷血翁著	近世偉人談	二十錢	四錢
西山芝山	近世慷慨家列傳	廿五錢	六錢
福地源一郎	尊號美談	四十錢	七錢

詩俳書之部

著畫者	書名	定價	郵税
烏崎藤村 中村不折	若菜集	二十五錢	四錢
平田骨仙	威海衛海戰記	七十五錢	十四錢
川崎紫山	日清海戰史	廿五錢	八錢
川崎紫山	日清陸戰史	七十五錢	十四錢
小笠原大尉畫	海戰日錄	四十錢	八錢
若林大尉	日清交戰錄	一圓七十錢	小包料百目迄
春陽堂編輯	海軍畫談	二十錢	四錢
毛鉄道人	清佛海戰日記	二十錢	四錢
小笠原大尉	海軍史論	壹圓十錢	

雜著之部

著者	書名	定價
大野酒竹	與謝蕪村	三十六錢
嶋崎藤村 中村不折	一葉舟	三十四錢
大野酒竹	鬼貫全集	五十八錢
角田竹冷 河村烏黑	俳諧太刀	二十五錢
松宇編	俳諧中興五傑集	近刊
島崎藤村 下村觀山	夏草	三十四錢
遲塚麗水	日本名勝記二冊	一圓廿二錢
勝海舟著 太井晩翠	鶏英・雄・論	三十四錢
	肋	六十二錢

石橋法學士著	民法親屬編通解	三十五錢
密蘭數葉入	本朝智惠袋	廿四錢
肝付大佐 大山翠松	世界將來の海王	三十六錢
通譯官 瀬戸晋著	北支那雜記	十五錢
牛山鴻堂譯	魯敏遜漂流記	十四錢
井上勤譯	狐の裁判	十八錢
仝	空中旅行	十八錢
鈴木券郎 縮緬表紙	煩惱菩提花柳お多福	廿二錢
松嶋剛 佐藤宏編	臺灣事情	十六錢
飯田旗郎	通俗貨幣制度論	十八錢
柳田箕作	營業通規	十五錢
佐藤四郎	海關通鑑	三十錢
橋瀬軍之進	朝鮮時事	二十五錢

合卷書籍目錄

新作十二番

半紙木版摺 共價一圓 郵税實税 全三十冊 九錢

一番 饗庭篁村著 勝関 全
二番 紅葉山人著 此ぬし 全
三番 山田美妙著 敎師三昧 全
四番 宮崎三昧著 桂姫 全
五番 南新二著 鎌倉武士 全
六番 學海居士著 十津川 全
七番 香雲山人著 梅その 全
八番 幸堂得知著 蓬萊噺 全

諸大家傑作 聚芳十種

全二卷 究壹圓 金壹圓 送料 廿錢

上卷目次

香雪散人著 花の種 全一冊
紅葉山人著 新色懺悔 全一冊
山田美妙著 やたらしま 全一冊
南翠外史著 臥待月 全一冊
抱一庵主人著 闇中政治家 全一冊

下卷目次

廣津柳浪子著 糸のみだれ 全一冊
三味道人露伴子著 七戀の重荷變化 全一冊
忍月居士著 黃金村 全一冊
幸堂得知著 さゝきげん 全一冊
竹の舍主人著 雪達摩 全一冊

文學世界

半版紙摺彩木版
色入郵稅宛
實價二錢宛

目次

紅葉山人作　命の安賣　全一冊
山田美妙作　猿面冠者　全一冊
二十三階堂作　かくし妻　全一冊
巖谷漣山人作　かたゝ糸　全一冊
忍月居士作　辻占賣　全一冊
水陸作　江見水蔭作　かくれんぼ　全一冊
松華庵主人作　野試合　全一冊
金春夢乙羽作　ひつじかい　全一冊
安主人作　今みゆき　全一冊
露友田作　をもい川　全一冊
廣津柳浪作　神も佛も無し哉有り哉　いとし兒　全一冊

狂言百種

故河竹默阿彌作
全部二十五冊
價各五錢
送料六錢

目次

村井長庵巧破傘　八幕
茲江戸小腕達引　三幕
怪談月笠森　三幕
島衛月白浪　五幕
淨瑠璃木問屋箱根鹿笛　四幕
淨瑠璃勸善懲惡孝子譽　五幕
新皿屋舗月雨暈　三幕
巖石碎瀑布勢力　三幕
三人吉三廓初買　七幕
水天宮利生深川身光於竹功　三幕

大通世界

幸堂得知標註字入小說黃表紙縮
全三冊
讀切字
入袖珍
實價廿
七錢郵
稅四錢

此書は幸堂得知標註字入小說黃表紙縮摹半紙木版彩色摺の表紙見返し美麗なる和本也。

古今名譽實錄

上下二冊
六十一錢
宛郵
廿稅

稗史俗傳は嘘でかため芝居譚は空事多し世人已に今日正史なく實傳なきを憾む弊堂此度嚴祕の古寫本數十卷を得たれば之を根據として豪雄偉傑の眞傳を編し文章を平易ゑして大方に頒つ

珍談倶樂部

全二冊
實價各十錢
郵稅二錢
各四錢

詩人が胸に浮かんだ空中の樓閣、珍談倶樂部とは當家でござる、マア一寸入つて御覽じろ、御家に傳てる小說家、文學者、美術家も居れば、政治屋も居ろ、軍人も居ろ、俳優も藝者も、僧侶も宣教師も、醫者もてんしやもいやもうてんやわんやに大勢居並んで、銘々面白いさいふ面白い話、珍談さいふ珍談をならべたてるを內々で筆記いたして毎月一回づゝ出版仕る、尤もこれは倶樂部員には極內の儀でござれば、高い聲では申されぬ、じやによつて飛切の低價をもつて發賣いたす、サア〳〵買てごらうじろ、

第一卷目次

懺悔目錄　松葉子筆記
渚　水同　人
あなあわれ　馬留雜九

第二卷目次

一死一生　枯林子
琴心　田山花袋

幼稚園

石版彩色摺
四六版美本
實價各七錢
郵稅各二錢

◎支那征伐手柄はなし　全二冊
◎歷史繪はなし　全二冊
◎修身繪はなし　全二冊
◎鳥づくし　全二冊
◎獸づくし　全二冊

清日 交戰錄

菊版全四十冊合本四冊
揮毫二百餘圖實價全部
金貳圓特別減價一圓四
拾錢送料四拾錢

賊劫 鳴神組 郵實價二八錢

滑稽小說 寒帷子 郵實價二八錢

漂流之佳人 郵實價二八錢

探偵小說

全五冊 日實價四錢各金五十錢郵税各四十錢

卷一
一 影法師
二 足跡
三 美人の手紙
四 風の狩人
五 血染の釘

卷二
六 集
七 集
八 集
九 集
十 集

卷三
十一 集
十二 集
十三 集
十四 集
十五 集

卷四
十六 集
十七 集
十八 集
十九 集
二十 集

卷五
廿一 集
廿二 集
廿三 集
廿四 集
廿五 集
廿六 集

人石菊

殘美
船中の殺人
物言ふ死體
女の子か

探偵小說 完

尾

珍書百種

宮崎三味校訂 實價二錢郵税四錢

此書一たび出でゝ鬼神哭せず山川撼かず天粟を降さず雨も降らず風も吹かず至て平穩上日和なり之を平凡といへば誠に平々凡々一向詰らぬ詮議なり但一たび此書を繙く者は再び手を釋く能はざる面白味あらん。

樂眞子後凋生合著

古今史譚

全一百一頁 餘一千一冊 實價一圓小金包税四百匁迄

古今史譚は樂眞後凋二先生が博引宏證廣く諸家の秘錄をかり之に自家の學識を加へて尤も眞率に古今の史乘の誤を正し落たるを補ひたるものなり。

寫眞畫報

全部上下特別減價二圓送料四十錢

美術畫畫類目錄

海戰畫帖

若林大尉著 寫眞全二冊 實價六十五錢 郵送料四錢

著者は常備艦隊の將校なり日清の役軍に從ひて怒濤驚波の間に敵の堅艦と戰ふもの數次其彼我奮鬪の狀を直寫して水彩畫帖に上すもの實に數百葉の多きに至る艶堂特に氏に乞ひて之を岡村信陽堂に附して印行せしむ然れども製版頗る至難にして屢々挫折したりと雖も然れども百難を排して第一卷黃海の卷を發兌し大いに大方の喝采を得たり我艦隊々伍整々として進むの間敵艦漸く來り忽ち蜂山倒海の大快戰を現じ來る第二卷威海の卷は我軍大勝電艇夜涙を劈いて北洋水師殲滅の慘狀望み見るが如し

中野其明編輯

尾形流印譜

日本紙木版摺 美本實價壱五錢 郵税四錢

尾形流百圖

日本紙木版摺上下二冊實價六十錢 郵税八錢

激戰中 平壤之眞景

寫眞版 壱二圖 全二冊 入各一冊 定價四十錢

上卷目次

野津大將 陸軍少將 混成旅團大部之圖
陸軍大將 從大江江羊角島下流圖
立見少將 望敵軍右翼砲臺之圖
平壤城內市街之圖 從平壤城內東北堡望大同江之側面圖
船橋里望大同江圖

牡丹臺之圖
城外村落兵焚後之圖

北征從軍之新聞記者

下卷目次

山縣陸軍大將
小川陸軍少將
福嶋陸軍中佐
兵站部之圖
混成旅團入平壤之圖
船橋里殉國勇士之墓
全堡壘戰後之圖

於第五師團本部圖
堂下俘虜群居之圖
大同江左方卒字軍營之圖
平壤野戰病院內圖
敵之創兵站療之圖
從軍新聞記者

占領地眞景

征清第二軍將校
花園口第二軍幕營
全揚陸塲臨時架設之棧橋
全海岸第二軍貨物揚陸場
全其二
全沖碇泊之船
貔子窩口全市之景
全港干潮之景
全潮之景
金州城遠望之景
金州城臨砲之景
野戰砲兵金州城砲擊之景

全一冊
眞銅版壯寫
圖入定價
四十五錢
郵稅四錢

金州城北面步砲兵總進擊
全攻擊之際第二聯隊薄城壁
全城北門之樓閣
全市街之大半
全城略取後俘虜糾問之圖
高家窩南方敵兵之伏罪
全城內第二軍司令部施粥之圖
大連灣柳樹屯棧橋之景

日清戰爭繪卷

鈴木華邨筆
遲塚麗水說
明賓價一冊
壯五錢郵
金二錢稅

第一卷目次
京城之卷

其一 釜山夜景
其二 仁川上陸
其三 韓廷改革
其四 京城衝突
其五 韓兵逃走
其六 危機一髮
其七 皇軍入城
其八 皇軍守韓闕
其九 王妃亟閟
其十 閔家滅亡
其十一 朝鮮風俗
其十二 袁世凱

第二卷目次
豐嶋之卷

其一 豐嶋海戰
其二 操江捕獲
其三 全繳
其四 高陞擊沈
其五 乘組員救護
其六 廣乙座礁
其七 佐世保病院
其八 濟遠逃走
其九 浪速航行
其十 高陞事件取調

欠

MISSING

小栗風葉著
水野方年畫

戀慕ながし

近刊

尺八の妙手と云て聞えたる一青年の薄命なる女ヴイオリストの相逢ふて暫く戀の樂しき調を合すはやも無く憂き世の嵐は忽ち其妙音を亂して管聲漸く月に枯れ琴線屢は雨に斷たんとす轗軻の士淪落の女諸共に風塵中に落る傍女主人公の老親と幼妹とありて東西に流離し又更に人世一部の哀を盡し來る戀慕ながしとは主人公が戀と望とを失ひてうつし世の巷に彷徨ひつゝ吹奏せる悽婉の悲曲なり

新機軸

後藤宙外著　實價卅五錢
富岡永洗畫　郵稅六錢

著者は新作家中の鋭才にして此書題するに新機軸を以てす、好箇の詩題うも如何の妙をか盡す、一畫家の多恨なるを主として一面枝藝の光明を接し、翻つては人間情事の悲慘を寫す筆路縱橫、此間の消息を傳へて餘す處なし。

蛇いちご

小杉天外著

⊙實價卅五錢⊙

奇警なる觀察と鋭利なる筆鋒とは天外氏が獨特の長所なり、然も氏が作常に短篇、爲よ其妙に飽く事を得ざらしめしを今蛇いちごの著ありて二百餘頁の大冊は其才筆を驅て一大傑作の稱を占めむとす

⊙郵稅六　錢⊙

梅二輪

旅商人　江見水蔭
新從五位　巖谷漣山人

ふところ子の續卷として此編は水蔭、漣両氏の短篇を收む春風南枝を吹くの處、誰か此清香を可懷しとせざらむや。

近刊

錦帶記

泉鏡花著

外より來る思あらしむる者今又其筆を落て此大編を成すあり錦帶記はそも如何の趣をか傳ふ。虹蜺あり盛夏の空に架りて五彩の美人目を眩す何等の壯觀ぞ鏡花氏の作妙は常に天に耀けり。

近刊

夏草

嶋崎藤村著
諸大家画

定價三十錢
郵税四錢

若菜集以後えばらく靜息して作を新體詩界に出すこと稀なりし島崎藤村氏は今夏筆を載せて山紫水明の境に遊び長短合せて二十餘種の新作をもたらして都に歸る晩春の別離月光五首等には藝術の愛慕やみがたき樣を寫し、新潮には實動の詩境に向ひて溢るゝばかりの熱情を傾け、佳人終焉の夕、嬰兒誕生の曉より、鶯、雁、金、二つの泉、天の河、落梅、哀歌、婚姻の祝の歌、もしくは高山遠望の歌等に至るまで或は自然或は人事の哀歡を歌ひ、ことに農夫のごときは作中の長篇にして青春の意氣を傾倒したるもの、また挿畫には諸大家が超逸秀麗の筆を振るゝものなれば、着想意匠の如きおのづから異彩を放つものあらん

學窓餘談

編輯主幹　松嶋剛

毎月發行一回凡百五十頁

學窓餘談は滿天下の青年男女の爲に博大なる中等普通學の知識を圓滿に附與し併せて內外の社會に現出する重要の事件を通俗的に解釋して東洋の文明國民たるに愧ぢざる必要の智德を兼備せしめんことを期す

學窓餘談は全國の公私立中等男女學校の校長教諭等の贊助を得て教場に說明する大の餘暇なき細大の事項に向て一大光明を放つべき高見卓說を掲げて中等教育の缺典を補はんを期す

學窓餘談は內外知名の學者事業家探檢者等の翼贊に由て百科萬般の事項に關し懇切周到なる解を施し中等男女學校並に小學校の教師諸君の益友たらんことを期す

學窓餘談は普通雜誌の如く智識の斷片を羅列するものに非ず廣く學者教育家に請ひ順序に從つて諸科の事項を講明し社會教育に資せんとす實に雜誌十〇錢八十錢

學窓餘談は僻地遠境にある講學者の爲に特別の便利を與ふべし其委細は本誌に載せたり

號數密版挿圖入

寶價一冊金拾五錢　郵稅五錢　賣價金八拾壹錢　前金六十錢　前金二冊分

近來絕無之奇書

金色夜叉

紅葉山人著

全四編已刊前一冊六十錢郵稅

美麗クロース〇本文活版二色摺

單調なる今の小說界に、萬頃の波瀾を湛へたる者は金色夜叉なり今の文壇に、絕大なる停滯を沈せる者は金色夜叉なり今の世間、反響を與へたる者は金色夜叉なり

偏に夾雜せしの嫌輝せる光を放つに足る

圓熟穩健なる氣象渾然たる筆力

蘊めるの妻者は金色夜叉

しく抱けるる疑問なり

假來れしる人物なり

多樣にして最も多く舞臺面なり

描ける事實は金色夜叉

の雜文に最も餘韻の趣なり

成華した章句は彼の英雄

曲折、其の別に自ら含む

文章の結規模縱直に書く

文章の綱規模の大なる

精力を發揮したる聖に於て獨り歩す

今や中篇の巧なる例の如し、

綺麗、製本

中編一冊寶價四十錢郵稅六錢

戸川殘花著

幕末小史

維新の政變は日本歴史の明暗兩界に一線を畫したるものなり、然して其明界に於ける明治初年の大業は西郷によりて、木戸によりて、大久保によりて、遍く人の知る處となりたるも、暗黑の一面即ち幕府の歴史は、惜しい哉之れを傳ふるに便鈔し、殘花戸川先生は徳川氏旗下の家に生れ、三河以來の血統を承けたるの人、其著三百諸侯、舊幕府の諸書に於いて名聲當代の文壇に輝やけり、然して今や幕末小史の著あり、此編材料を先生が家傳の珍書と勝木村二翁其他初先輩の談とに取り、其奇拔なる着眼と、剛健なる筆とを以て徳川幕府の爲に萬丈の氣焔を吐きたるもの何ぞ尋常一樣の歴史と異として見るべけんや

定價一冊五錢郵税六錢　御部五錢全文註に限り金壹圓五拾錢外に郵税四錢

新小説

毎月一日發行　四五頁　定價金貳拾錢　郵税二錢六厘　前金一圓十二冊　金二錢十冊

新小説は我文壇に於ける小説雜誌の泰斗なり。新小説が收むるものは各大家の傑作と新進英才の佳什なり。新小説の毎編挿入する木版、コロタイプ版、寫眞版等の繪畫は當時有名の壽伯が意匠と製版印刷の斬新なるとを以て錦上花を添るの美觀を呈す。

小野栗風葉方　水野年方　著畫

地下らつか

風葉子が一ヶ年餘の年月を閲して經營苦心專ら精魄を練りしものは髮下地の一編なり子が作は常ゝ着想の精深なると文辞の華妙なるとを以て鳴る而して此編は最も筆力の淵翻を極む蓋し近來の傑作なり

（近刊）

長田秋濤譯

俠客の波瀾

古今の英雄奈波翁が無双の武勇は百世の下之と傳へて識らざる者なし然も彼大英雄が如何ゝ戀てふ者の力ゝ動かされしか唯此書を讀め奇絶怪絶人の罵ゝだも想を到らざる邊ゝ大英雄半面は曝露さる、也

●價六十錢郵税八錢●

夜の風

村井弦齋著

近刊

或は愁ふべきあり然して其悲や愁や轉じて幸とあり福となり殆ど案を拍て快と叫ぶに終る子の筆例に依つて明快

日東の偉男子志を立て、万里の他郷ゝ一攫千金の利を占む其間人生の多事ある或は悲むべきあり

村井弦齋　福良竹亭著

西郷隆盛評傳

賀價六十五錢　郵税十錢

如何ゝして此大偉人は生れたるか、如何ゝして隆盛は成効したるか如何にして彼は終りたるか、此書は隆盛が家素及出生ゝより初め年を追ひて記する事甚詳細一々當年の故老ゝ問ひて事實の正しきを探り通俗平易の文を以て編成す

美裝大冊

村井弦齋著

老松之卷

近刊

挿畫艶麗

當世活人畫

名士と閨秀の平常

朝野諸名士閨秀の寫眞及眞蹟十數葉挿入（近刊）

儘世翁著

題して當世活人画といふは現今朝野よ名ある士と閨秀の性狀氣質を投え來りて紹介するものなり一度此の卷を繙かば親しく其の人の面よ接し語を交ふるの感あらむ

82
2
44 P

82
2
44ロ

Ⓜ

023047-001-5

82-44ロ

日本名勝記

遅塚　麗水（金太郎）／著

M31, 32

ADB-1020

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]